附属学校国際教育推進委員会報告書（第 15 集）

～ 2023 年度～

附属学校群の国際教育の推進

2024 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目　次

1．はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究と WWL 事業

副学長・附属学校教育局教育長　呑海　沙織 …… 3

2．附属学校の国際教育 …… 4

3．共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 …… 6

4．各附属学校の国際教育活動

⑴　先進的教育技術交流及び児童の主体的な国際交流を目指して

（附属小学校）…… 10

⑵　附属中学校における国際教育活動

（附属中学校）…… 12

⑶　2023 年度の国際交流の報告

（附属高等学校）…… 16

⑷　駒場らしい国際交流とは ―研究交流と文化交流―

（附属駒場中・高等学校）…… 20

⑸　学校を起点に“共に生きる”を

（附属坂戸高等学校）…… 28

⑹　視覚障害教育における「せかい×まなびのプラン」に向けて

（附属視覚特別支援学校）…… 33

⑺　音声、文字、手話、非言語をフル活用！異文化コミュニケーション

（附属聴覚特別支援学校）…… 40

⑻　附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み

（附属大塚特別支援学校）…… 45

⑼　コロナ禍を経て直接交流復活の兆し

（附属桐が丘特別支援学校）…… 51

⑽　附属久里浜特別支援学校の国際交流

（附属久里浜特別支援学校）…… 56

５．各附属学校のイングリッシュルーム活動
⑴　体験を通して他者理解、異文化理解の充実を図る
（附属小学校）…… 60
⑵　附属中学校　English Room 活動報告
（附属中学校）…… 62
⑶　附属高等学校のイングリッシュルーム活動について
（附属高等学校）…… 63
⑷　English Room 実践報告
（附属駒場中・高等学校）…… 64
⑸　各生徒のニーズに応えるイングリッシュルーム
（附属坂戸高等学校）…… 65
⑹　附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動
（附属視覚特別支援学校）…… 66
⑺「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して
（附属聴覚特別支援学校）…… 68
⑻　附属大塚特別支援学校のイングリッシュルーム活動
（附属大塚特別支援学校）…… 70
⑼　楽しみながら学ぶイングリッシュルーム
（附属桐が丘特別支援学校）…… 71
６．おわりに
ポストコロナ本学附属学校の国際教育を振り返って
附属学校国際教育推進委員会 委員長　梶山　正明 …… 75
（資料）附属学校の国際交流協定締結状況 …… 76
報告書発行の記録 …… 82
委員会名簿 …… 83

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究とWWL事業

副学長・附属学校教育局教育長　呑海　沙織

2023年5月、COVID-19の感染症法上の位置づけが「5類」に移行し、政府・大学による行動制限がなくなったことに伴い、多くの附属学校で対面による国際交流が再開されました。また、行動制限下での交流の経験を生かし、様々に工夫を凝らしたオンラインによる交流を継続したほか、教員研修や留学生の受け入れを実施した学校もありました。このような変革の時期にある各校の実践研究の詳細をお届けし、情報の共有を図るために、附属学校国際教育推進委員会報告書第15集を刊行することとしました。

附属学校教育局では、今年度も文部科学省よりWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の幹事管理機関を受託しており、WWL事業によるグローバル人材育成の全国展開において中核的な役割を担っています。6月30日には、筑波大学東京キャンパスにおいて、「令和5年度WWLコンソーシアム構築支援事業およびスーパーグローバルハイスクール（SGH）ネットワーク連絡協議会」を4年ぶりに対面で開催し、教員や関係者117名の参加がありました。参加者からは、対面での情報交換の機会がたいへん有意義であったとの評価を得ました。また、12月17日には、WWLコンソーシアム構築支援事業およびSGHネットワークに参加する国内外の109校の生徒および教員・関係者約450名が参加し、国立オリンピック記念青少年総合センターにて「全国高校生フォーラム」をこちらも4年ぶりに対面で開催しました。参加各校の高校生は、英語によるポスターセッションやグループディスカッションを通じて、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案について審査委員から講評を得るとともに、目的を同じくする仲間との交流を深めることができました。

さて、筑波大学は、第4期中期計画・中期目標（2022～2027年度）の中で、附属学校群に関して以下のような国際教育およびグローバル人材育成に関する実践研究の実施を掲げています。

【中期計画23】大学と連携し、研究に基づいた学校教育の先端化を進めることにより、高大接続の新たなモデルをつくる。

（評価指標38）大学との連携体制強化のための先取り履修・単位認定システムを令和9年度（2027年度）までに構築する（オンラインによる履修を含む）。

この中期計画は、将来的には海外校からの先取り履修を視野に入れており、その達成に向けて2022年度よりWWL新規事業「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」、構想名「持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築」事業を、附属学校教育局が中心となって、大学と附属学校群との連携を図りながら推進しているところです。

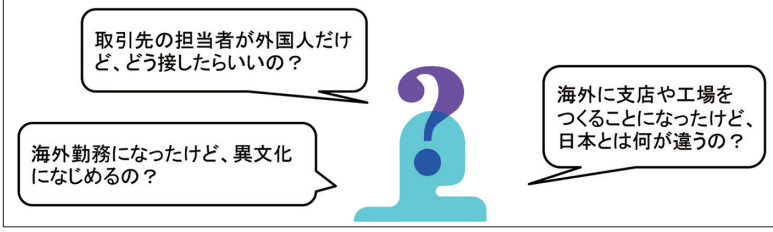
本学附属学校群は、3つの拠点構想のひとつである「国際教育拠点」において（他の2つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養うこと等を目指すとしています。附属学校群各校独自の国際交流プログラムと附属学校教育局を中心としたWWL事業を両輪として、今後も第4期中期計画に基づく研究実践を進めてまいります。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

なぜ、国際教育は必要なのか？

「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきている。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。



グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

●21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は，
(1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
(2)国際的リーダーとなる人材の輩出
(3)国際的な連携の構築
であると考える。

●筑波大学は，急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで，世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために，未来を切り拓く知の創造を通じて，地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかかげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

●幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
●教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。
グローバル社会で活躍する視覚障害当事者を育成する。

【聴覚】

国際交流を通して、異文化を理解したり主体的にコミュニケーション取ろうとしたりする国際的資質を身に付けた人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲、また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみを持ち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の				
各校の国際教育の目標（国際教育を通じて育成する生徒像）		各校の特色を生かし 小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。			トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。	総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。
（国際教育を通じて広がる教師力）		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色（長・短を含む）を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。 ・姉妹校の教員と教育方針等について協議し、その類似点・相違点から本校の特色を捉えなおす機会になる。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
（国際貢献）		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・アジア各国の高等学校との協働を通して、世界の持続発展可能な社会の構築に貢献する。
取組（令和5年度）	幼児児童生徒	・筑波大学外国人留学生との交流会 ・4年生の希望者に、ハワイ語学研修会を3月末に実施。（ハワイ大学付属小学校・付属高校・私立校であるミッドパシフィックとの交流）	・独立行政法人国際協力機構 JICA 主催・異文化理解イベント（出張展示民族衣装体験会）に30名が参加（8月29日） ・アメリカ短期留学（ペンシルバニア州 West-Mont Christian Academy） に37名が参加（3月20日～29日） ・国際交流プログラムに42名が参加（3月25～27日）	・筑波大学大学院生（韓国出身）を講師に校内で韓国学習会に生徒23名が参加（7月12日） ・国際学術シンポジウム（韓国）に生徒3名がオンライン参加（7月26日） ・プリンスエドワード アイランド大学へ英語研修に生徒20名が現地参加（8月12日～27日） ・シンガポール出身の昭和女子大学教授による校内でのシンガポール学習会に25名が参加（10月27日） ・シンガポール、ホアチョン校とのオンライン交流会に生徒8名が参加（11月15日） ・全国高校生フォーラムに生徒1名がポスターを展示（12月17日） ・Stanford e-Japan 2024春学期（オンライン）に生徒1名が選ばれ参加（2024年1月～6月） ・筑波大学模擬国連に生徒6名が参加（2024年3月21日）	・2023年5月23日に国際交流デイを開催。台中市立台中第一高級中学校の生徒約50名と交流 ・2023年12月12日～12月15日に高校1、2年生16名が台湾を訪問。台中一中と台北中正中を訪問。現地生徒と研究発表を通して交流。 ・2024年1月25日に釜山国際高校の生徒15名が来校。高校1、2年生と交流を深める。 ・2024年3月25日～3月28日に釜山を訪問予定。釜山国際高校、Korea Science Academyの生徒と交流予定。	・筑波大学 AIMS プログラム留学生との交流会（2023年6月3日：ASEAN 諸国からの留学生25名、生徒35名参加） ・東京国際大学留学生との交流（2023年7月31日：留学生10名来校、生徒90名参加） ・高大接続先取り履修科目「国際農業研修Ⅶ」＠インドネシア（2023年8月1日～11日：筑波大学生8名、生徒6名参加） ・第12回高校生国際 ESD シンポジウム・The 5th SDGs Global Engagement Conference @ wherever you are（2023年11月11日：海外校6校、国内6校参加） ・イオン1%クラブティーンエイジアンバサダープログラム参加@日本＆ベトナム（2023年11月13日～18日：日本プログラム、2024年1月14日～21日：ベトナムプログラム、生徒10名、教員2名） ・オーストラリア春季研修プログラム＠西オーストラリア（2024年3月24日～4月2日：生徒32名・引率2名）

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。 グローバル社会で活躍する視覚障害当事者を育成する。	国際交流を通して、異文化を理解したり主体的にコミュニケーション取ろうとしたりする国際的資質を身に付けた人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通じてスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲、また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味・関心に応じた触れ合いから、外国や外国の人について親しみをもち、相手と関わろうとする意欲を育む。
・外国文化の研鑽を深める。 ・グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・視覚障害教育における多様な指導方法等を知り、教育活動に活かす。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケ - ション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていこうとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・海外における知的障害を伴う自閉症児への教育に関する知見を深める。 ・自閉症教育の国際教育拠点として、研究成果を海外に発信する能力を身に付ける。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援教育関係者への成果発信。
・本校に在籍する鍼灸手技療法科留学生との交流会（小学部） ・タイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校生徒とのオンライン交流会の実施（高等部） ・米国における視覚障害者の教育および就労に関する研修の実施（高等部）	・韓国国立ソウル聾学校との国際交流協定の更新、オンライン交流（中学部７月） ・フランス国立パリ聾学校来日による対面交流（5月16日）、オンライン交流（11月） ・第５回日台聾学校美術交流展、臺北市立啓聰學校、臺南大学附属啓聰學校と本校児童生徒の作品展開催（1月19日～21日市川市芳澤ガーデンギャラリー）	・幼稚部、小学部、中学部、高等部における ALT の教員による英語の授業の実施 ・JICA 研修員との交流 ・東京グローバルゲートウェイでの校外学習実施	・中南米７か国（ドミニカ共和国、ベリーズ、コロンビア、ウルグアイ、パラグアイ共和国、ペルー、グアテマラ）の JICA 研修員による小学部国語の授業見学。 ・筑波大学外国人教員研修留学生 10 名（アゼルバイジャン、ミャンマー、ジンバブエ、ボツワナ、インドネシア、リベリア、大韓民国、ルワンダから各国１名、およびナイジェリア２名）と高等部生徒との国際交流。 ・給食で世界の料理（韓国、オランダ、インド、モザンビーク）を提供。 ・幼稚部、小学部、中学部、高等部における ALT の教員による英語の授業の実施。	・第 19 回アジア大会開催を共通テーマとした、中国達敏学校の児童生徒との交流授業の実施。

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組（令和５年度）	教師国際貢献含	・韓国から授業研究教員の授業参観・意見交換会 ・算数教員による北欧・英国算数授業研究会を現地で実施（デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会、英国ケンブリッジ附属小学校での授業、および授業研究会・日本のカリキュラムについての講義） ・算数教員によるインドネシア算数授業研究会を現地で実施（ジャカルタ・ジョグジャカルタ・バンドンにおいて算数授業研究会の開催）	・中国教育部中学校長研修センター代表団より18名が視察のために来校	・ソウル国立大学教授と附属学校教員の視察受け入れ。（5名来校）（5月） ・ポツダム大学教授との交流（数学の授業参観受け入れ：1名来校）（6月29日）	・2023年4月25日、台北市立中正高級中学校の教員が来校。本校の授業を見学後、教育方針等について協議 ・2023年5月23日国際交流デイ開催時に台中一中の教員3名と教育方針等について協議 ・2024年1月25日釜山国際高校来校時に教員3名と教育方針等について協議	・タイ・カセサート大学附属高等学校から留学生（1年間）を3名受入（2023年4月～2024年3月） ・インドネシア教育大学附属高等学校と国際教育連携協定締結@バンドン（2023年8月7日調印） ・筑波会議2023におけるASEAN-日本の友好協力50周年記念に登壇@つくば（2023年9月28日:生徒3名、教員1名） ・第3回SEA-teacherパイロット事業受入（2024年2月6日～3月5日:インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルソン大学　教育実習生各2名計6名） ・12th SEAMEO - University of Tsukuba Symposium onにおける本校教員の登壇（2024年2月28日）
環境整備	現状	・ALTと自由にコミュニケーションが図れるイングリッシュルームの活用。	・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。	・ウェブ会議のシステム。	・高度情報化事業に伴い、Google Meet/Zoomなど利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を実施。 ・English Room講師による発表プレゼンの指導	・海外附属学校や海外大学と連携した、国際会議、探究学習を実施している。今後、単位認定や継続的な国際会議を検討する。
将来構想		・英語専科教員の増員（小学1年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保。 ・コロナウイルス、政治的な理由で途絶えていた韓国での授業研究会の再開	・ALTとのティームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。	・ウェッブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。	・海外派遣で交流の確立している相手校とオンラインを通じた研究交流また合同研究。 ・SSH以外に財政的支援を求め、海外交流をさらに活性化する。 ・英米の学校との交流開始 ・ホームステイプログラムの実施	・SEA-teacherプログラムや、アセアン各国の国際連携協定校との連携を拡大強化し、アジア版エラスムスのプロトタイプ版を提言、実現する。 ・国を越えた教職員人事交流事業の実現に向けた構想の提言を行う。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
・台湾・高雄医学大学からの本校資料室見学受け入れ ・台湾・台北市立啓明学校（盲学校）視察及び教職員と教育支援やインクルーシブ教育についての意見交換 ・韓国・社会福祉法人シロアム視覚障害者福祉会からの視察受け入れ、インクルーシブ教育・盲ろう教育についての情報交換 ・ドイツ・ニコラスフレーゲ盲学校、アメリカ・カンザス州立盲学校からの教職員視察受入・インクルーシブ教育と盲学校の現状についての情報交換 ・タイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校及びインクルーシブ教育校授業視察	・韓国国立公州大学教員の学校参観受入れ ・JICA 課題別研修「インクルーシブ教育実践強化～すべての子どもを支える授業づくり」の南米（コロンビア、ドミニカ共和国、グアテマラなど）の特別支援教育関係者８名の視察受入れ ・JICA 委託事業ウズベキスタン国就学前教育におけるインクルーシブ教育実践強化プロジェクトへの協力（ウズベキスタンの幼稚園及び特別支援学校、通常の学校における聴覚障害児の指導に対するコンサルテーション） ・JICA 委託事業ウズベキスタン国就学前教育におけるインクルーシブ教育実践強化プロジェクトの研修生の受入れ	・研修や視察の受け入れ（大邱広域市教育庁世明学校、ウズベキスタン、JICA：ジョージア、イラク、カンボジア、モロッコ、マラウイ、マダガスカル、モーリシャス、シェラレオネ、エジプト、台湾新北市政府教育局） ・韓国　ソウル日本人学校へのコンサルテーション	・ＴＯＫＹＯ　ＧＬＯＢＡＬ GATEWAY 立川の視察。 ・台湾国立和美実験学校と交流再締結に向けて交渉中。	・アイダホ州立大学、モンゴル教育科学省就学前教育局、JICA、米国マンスフィールド研修などの研修視察受け入れ。 ・中国達敏学校教師との教育活動の紹介や情報交換。
・ウェブ会議システム	・ウェブ会議のシステム ・音声文字変換アプリの充実	・スカイプを活用した実践。 ・教材・教具の展示	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議システム等の活用。 ・図書室の海外絵本コーナーの設置。
・国際交流協定校への短期留学の継続及び生徒の受入 ・本校生徒の長期留学に向けた制度、基盤を作る。留学に係る奨学金等費用の確保。 ・留学生支援の充実。	・コロナ禍で中断した渡航による国際交流の再開 ・海外への教員派遣の再開 ・学外に公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・聴覚障害教育における海外のインクルーシブ教育の現状と課題に関する情報交換 ・アジア太平洋地域聴覚障害問題会議（APCD）及び第21回ろう教育国際会議等での発信	・継続的な教員の海外派遣交流視察、研修の機会の設定。	・ウェブ会議システムを活用した授業交流や情報交換とともに、対面での異文化交流を一層充実させる。 ・以前の海外提携校や新たな海外校との交流を開拓する。	・ウェブ会議システム等を利用し、姉妹校教師間で授業検討会を実施し、自閉症教育の発展に寄与する。 ・ウェブ会議システム等を活用し、幼児児童間のより充実した交流方法を検討する。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流及び児童の主体的な国際交流を目指して

１．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を活かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度は、毎年継続して行われているコペンハーゲンとケンブリッジにおいて、算数の授業研究およびワークショップを行った。また、今年度は新たにインドネシアにおいて算数の授業研究を行った。算数科の教員が現地校に訪問し、授業及び、授業協議会を行うとともに、教育課題について討議する有意義な時間をもつことができた。

児童の国際教育活動は、筑波大学に在籍している留学生との交流会や、休み時間に ALT の教員とのコミュニケーション活動を通じて、グローバル人材の育成を目指す取り組みを続けている。人とのつながりを通して、異文化理解を深め、共に幸せに生きていくために相手を思いやり、関わっていこうとする主体性をもった児童を育てることを目標としている。

２．活動報告

（１）海外校との授業交流

コペンハーゲン・メルトフテ小学校での授業及び授業研究会の実施（算数）

英国・ケンブリッジ大学での授業及び授業研究会の実施（算数）

インドネシア（バンドン・ジョグジャカルタ・ジャカルタ）での授業研究会の実施（算数）

（２）児童の海外交流プログラム　ハワイ大学附属小学校交流

本年度 3 月に児童 34 名と教員５名の参加予定でハワイ大学附属小学校との交流を予定している。1 月から参加希望児童が交流準備を始めており、英語による異文化理解・交流を深める予定となっている。

附属中学校における国際教育活動

１．本校の国際教育の特徴

本校における国際教育は、グローバル化した多種多様な社会において、地球的視野に立ち、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するために、自己を確立し、他者を受容し共生しながら、発信し行動できる力を育成することを目標としている。

例年行っている活動としては、ALT と個別に会話を楽しむことのできるイングリッシュルームの開室や、年度末に希望者に向けて実施しているアメリカ短期留学プログラムである。それらに加えて、今年度は、英語圏以外の世界の国々へも興味・関心を持つことができるように、異文化交流イベントや国際交流プログラムを実施した。

２．国際教育活動報告

(1) 異文化理解イベント

独立行政法人国際協力機構 JICA 主催行事である、出張展示民族衣装体験会を希望者に向けて実施した。実施内容は以下の通りである。

①目的：日常生活ではあまりなじみのない世界のさまざまな国の民族衣装を試着したり、文化に触れたりすることによって、視野を広げ、生徒の興味・関心を喚起する。

②日程：8 月 29 日（火）13:00～14:30 （育鳳館）

③参加者：コーディネーター１名（JICA 職員）、ボランティア大学生２名、JICA 研修生３名（サモア・セネガル）、生徒：３０名、教員：５名

④内容

生徒は二つのグループに分かれ，民族衣装体験，研修生との交流，研修生からのプレゼンテーション鑑賞の３つの体験を行った。

【民族衣装体験】

10 カ国（コートジボワール・インドネシア・カザフスタン・パナマ・ミクロネシア・イラク・インド・モロッコ・キルギス・サモア）の衣装から，生徒たちはそれぞれの衣装を思い思いに手にとり，試着して楽しんでいた。機器の関係でバーチャル背景を作り出すことができず，残念であったが，実際に見る機会があまりない国々の衣装に興味深そうにしている姿が印象的であった。地図で国の位置を確認したり，JICA 職員からの説明を受けたりしながら，気候や宗教の違い，衣装に込められた意味等を学びながら体験をしていた。

【研修生との交流】

日常生活ではなかなか出会うことのないバックグラウンドを持つ研修生と一生懸命に英語でコミュニケーションをとる姿があった。研修生も生徒たちも，英語を母国語としていない。世界には「いろいろな英語を話

す人がいる」ということや，「英語を話すことで世界中の人々と繋がることができる」ということを実感したことだろう。 また，母国語でなくても研修生たちが自由自在に英語を操る姿にも刺激を受けたようだ。

【研修生からのプレゼンテーション】

サモアからの研修生によるプレゼンテーションを鑑賞した。クイズ形式になっており，生徒の興味・関心をそそる内容であった。質問を促されると，複数の生徒が手を挙げて発言するなど，積極的に参加していた。

⑤まとめ

１グループ１時間程度のプログラムであったが，生徒は十分に楽しんだのではないか。「学びが多いプログラム」というよりは，お手軽に参加でき，より広い世界に目を向けるきっかけとなるプログラムとなったのではないかと思う。ここで見つけた「興味」を自分自身で深化させていけるようなフォローアップができたらよい，と感じた。

⑥生徒の感想

今回，イベントに参加させてもらうことができ，とても良かったです。世界の広さと美しさを実感できました。そして，個人的にいくつかの発見がありました。

一つ目は，自分の中の認識と実際の人々の感情との繋がりが生まれたことについてです。サモアのナタリヤさんは，独立国サモアがドイツやニュージーランドの支配下から自由になったということをおっしゃいました。それは，インターネットでも調べると学べる知識です。しかし，その後に，「Yeah!」と嬉しそうにされていました。私はそんな姿を見て，やはり歴史の教科書で習うことと，実際の人たちの声を聞くのとでは全く認識が異なるな，と痛感しました。

二つ目は，万国共通のことについてです。例えば，恋愛についてのお話は（俗に言う，「恋バナ」）言語や民族を越えて一気に距離を縮めることのできるものなのだということです。今回，サモアのナタリヤさんと少しそのようなお話があった時に，みんなウキウキして楽しそうにコミュニケーションを取れていたので，それをよく感じました。恋の話というのは，同じ人間として生きている実感が持てるからこそ，すぐ仲良くなれるのではないかと思います。

このように，今回のイベントで様々なことが学べました。さらに，英語の実践や異文化の服装についての理解も得ることができ，本当に楽しかったです。ありがとうございました。

(2) アメリカ短期留学プログラム

令和４年度の春休み期間にアメリカ・ペンシルベニア州にある West-Mont Christian Academy への短期留学を実施した。毎回多くの希望者がいる中、選抜された２・３年生計 37 名（２年 12 名、３年 25 名）が参加した。実施内容は以下の通りである。

①目的：

ⅰ 現地の学校生活を経験するとともに，アンバサダー(学校で付き添ってくれる在校生)やホストファミリーとのふれあいによる異文化理解・異文化交流を通して，視野を広げる。

ⅱ 英語を実際に使う体験を通して，外国語学習や学校生活全般への意欲を高める。

ⅲ 海外での経験を他の生徒に伝え，他の生徒の海外への関心や外国語学習への意欲を高められるような働きかけを行う。

②日程：２０２３年3月２０日（月）～　3月２９日（水）　１０日間

③内容：

3/20 月	（日本時間）8:15 集合　11:05 羽田出発（予定）　出発遅れ (約 20 分) （現地時間）11:31 予定より 30 分ほど遅れて JFK に到着　バスでペンシルベニア(PA)へ グループ① WCA で下車　グループ②QUAKERTOWN で下車 →ホストファミリーへ
3/21 火	8:00 頃チャペル集合→校長先生と Kelsall 氏からの話→アンバサダーとマッチング ２限目よりマッチングされた各アンバサダー（＝バディ）と授業へ (8:59 2 限開始　14:45 ８限終了) ８限目 日本文化交流：書道・こま ※送迎はホストファミリー／カープール
3/22 水	アンバサダーと授業に出席（8:00 にチャペルに集合，8:13 1 限開始　14:45 ８限終了） ８限目 日本文化交流：かるた・おりがみ ※送迎はホストファミリー／カープール
3/23 木	アンバサダーと授業に出席（8:00 にチャペルに集合，8:15 1 限開始） 8 限目 日本文化交流：盆踊り・あやとり ※送迎はホストファミリー／カープール
3/24 金	アンバサダーと授業に出席（8:00 にチャペルに集合，8:15 1 限開始）　※集合写真撮影 14:30　8 限の途中まで通常授業 14:30　経験のシェアリング@チャペル 15:00　フェアウェルプログラムでの出し物のリハーサル@体育館 16:00　フェアウェルプログラムとピザパーティ＠体育館 （アンバサダー，WCA の教職員，ホストファミリーと） ※送迎はホストファミリー／カープール
3/25 土	ホストファミリーと過ごす
3/26 日	ホストファミリーと過ごす
3/27 月	フィラデルフィア観光 7:45WCA を出発→自由の鐘･独立記念館→ボーズ（ショッピングセンター）で昼食→バーンズコレクション（美術館）→JFK 空港近くのクラウンホテルへ→18:30 頃到着（ホテル泊） 夕食後 Visit Japan Web の確認→アンケート記入
3/28 火	8:00 集合・朝食 9:30 空港へ移動→13:20 JFK 空港出発
3/29 水	（日本時間）16:59 羽田到着　定刻より約 30 分遅れ 17:30 過ぎ　荷物受け取り確認後解散

④まとめ

本プログラムでは、アメリカ東海岸の現地中学・高等学校を訪問し、現地の学校生活を体験しながら、アメリカ人生徒と交流を図った。また、現地ではホストファミリー宅に滞在し、週末はそれぞれファミリーと一緒に過ごし、言葉も習慣も違う中、親元を離れてままならない生活体験を通して自分や日本での生活、日本という国を振り返る機会を得ることができた。

さらに、帰国後には、新３年生に向けて、プログラムの紹介を兼ねた報告を行い、10 月に開催された学芸発表会では、来場者にプログラムの内容を伝えるブース設置を企画から行った。参加生徒のみならず、全校生徒への国際交流の興味喚起を促す活動となった。

⑤生徒の感想

突然私たちを受け入れることになったにも関わらず、「3 年前から、日本人が来てくれることをずっと待っていた。全然急なんかじゃない」と言ってくださり、その優しさに感動しました。10 日間は思っていたよりもあっという間で、日本に帰ってきてから「もっと色んなことを話しておけばよかったな」と少し後悔しています。授業の内容が分からなかったり、言いたいことを上手く伝えられなかったり、難しかったこともたくさんあったけれど、とても楽しく、充実した 10 日間でした。

ホストファミリーやバディときちんとコミュニティーをとれるかなど、行く前から構えて緊張していたことがあったが、皆とても親切で沢山話しかけてくれ、安心した。あまり構えず、伝えたいことをそのまま伝えれば会話できることが分かった。英語で違う国の人々と会話する楽しさを知り、今まで学校でしていた英語の学習がそのためだと、モチベーションを得られた。これからはもっと英語に触れ、アメリカだけでなく様々な国のことを知り、また今度アメリカを訪れたいと思う。

2023 年度の国際交流の報告

１．本校の国際教育の特徴

2023 年度は，コロナ前の 2019 年度以来 4 年ぶりに，一部海外渡航による国際交流を再開することができました。なお，シンガポール・ホワチョン校主催のアジア太平洋ヤングリーダーズサミット(APYLS)は隔年開催となり，次回開催は 2024 年度となりました。今年度の国際交流の実施内容は以下の通りです。

〈渡航による実施〉

１．プリンスエドワード島大学英語研修(カナダ)

〈対面方式による実施〉

２．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

３．崔智恩（チェジウン）さんの韓国学習会

〈オンラインによる実施〉

４．ハナアカデミックシンポジウム(韓国・HAS)

５．シンガポール短期留学(代替交流)

〈ポスター掲示での実施〉

６．高校生国際フォーラム

１．プリンスエドワード島大学英語研修(カナダ)

2019 年度以来，4 年ぶりにカナダ・プリンスエドワード島大学（UPEI）にて研修を実施することができました。８月 12 日から 27 日までの 16 日間，本校二年生 12 名，一年生 8 名がカナダ東海岸にあるプリンスエドワード島（PEI）にあるプリンスエドワード島大学を訪問しました。

滞在中はホームステイ先から大学へ通学しました。午前中は、筑波大学附属高校用に開設された講義と演習，午後はダウンタウン散策など様々なアクティビティーが行われました。一日を使って，赤毛のアンでおなじみのグリーンゲイブルズも訪問しました。研修最終日には，本校生によるプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションの評価を後日受け取りましたが，全ての生徒が高い評価を得ることができました。

多民族国家であるカナダでの本研修を通して，真のインクルージョン教育とは何か，を肌で感じ取ることができたのではないでしょうか。この研修で行ったプレゼンテーションは，9 月の桐陰祭でも行いました。発表会場には，本校生徒だけでなく，多くの保護者にも参加していただきました。それぞれの発表後は，活発な質疑応答が英語で行われました。

２．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

2023 年 10 月 27 日（金）の午後３時 30 分～５時 30 分の日程で，シンガポール特別授業を実施しました。講師は，毎年お願いしているシム・チュン・キャット先生（昭和女子大学教授）です。先生は本校と交流のある，シンガポールのホワチョン校ご出身です。東京大学大学院へ留学後，シンガポール教育省に勤務されていたこともあり，「シンガポールの教育事情」をテーマに講演していただきました。レクチャーと参加者のディスカッションを交えた形式で，英語で行われました。

教育に関する各種データを用い，シンガポールと日本だけではなく，複数の国々との相違点についてもお話しをうかがうことができました。特に，シンガポールと日本，諸外国の教育制度の違いについて，また，なぜそのような制度が取り入れられているのか等の，具体的なお話を聞くことができたことは，生徒にとってよい学びとなりました。

３．崔智恩（チェジウン）さんの韓国学習会

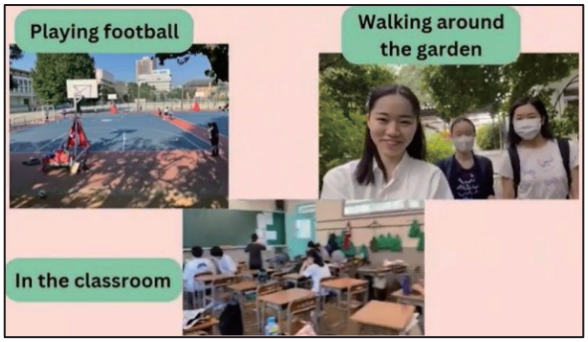
昨年度に引き続き，2023 年７月 12 日（水）の午後３時 30 分～５時 30 分の日程で，韓国学習会を実施しました。講師は，今年度も筑波大学大学院・人文社会ビジネス科学学術院の崔智恩さんにお願いしました。筑波大学に在籍し、日本語教育について研究かつ実践をされている方です。

学習会は，簡単な韓国語講座があり，韓国語での挨拶についてお話いただきました。その後，韓国の文化や伝統，日本との類似点，相違点その他，様々なことについてお話しいただき，韓国の歴史についてのわかりやすい説明などもあり，本校の生徒のよい学びとなりました。韓国の高校生の１日の過ごし方が日本の高校生と比べて非常に多忙であり，参加した生徒たちは大変驚いていました。

４．ハナアカデミックシンポジウム（韓国・HAS）

毎年７月下旬には，韓国のハナ高校主催の高校生国際シンポジウムが開催されています。コロナの影響でここ数年間はオンラインによる開催が続いており，残念ながら本年度もオンラインによる１日

だけの開催となってしまいました。このシンポジウムに参加する前に，早稲田大学高等学院の先生が企画した，日本から参加する高校のプレゼンテーションを紹介し合ってお互いに質疑応答をするという事前準備を行っています。7月26日に実施されたシンポジウムに参加したのは，2年生3名です。当日は，午前9時から午後4時まで情報実習室から参加しました。本年度のテーマは“Digital Citizenship for Future Generations”であり，そのテーマに沿った論文(“Global Education Initiative for Responsive Online Behavior”)とその内容に関する下図のようなプレゼンテーション動画を事前に提出しました。当日は，各国の動画が紹介され，その動画の内容についてディスカッションを行うという形式でした。



５．シンガポール短期留学(代替交流)

例年は3月下旬に，シンガポールのホワチョン校（Hwa Chong Institution）へ約10日間の短期留学をしていますが，コロナ禍2022年度に引き続きオンラインによる交流を実施しました。今年度は，11月15日（水）午後4時～6時に行われ，本校生徒8名（1年生6名，2年生2名）とホワチョン校生徒8名との交流を行いました。事前交流として，全員が自己紹介ビデオ，各校で自国紹介動画と学校紹介動画を作成し，オリジナリティあふれるそれらの動画を半月前から互いに共有，及び視聴をしました。

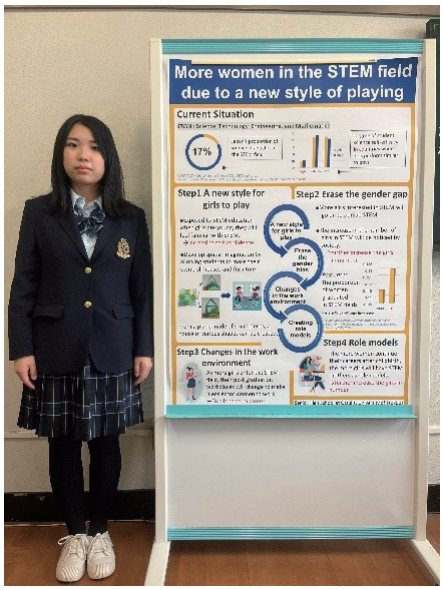
本番では，オンライン会議システムを活用したアイスブレイクで打ち解け合った後，事前交流を踏まえたグループ交流を経て，メインプログラムとしてのグループディスカッションを行いました。トピックは，「SDG11：持続可能な都市づくり（UN SDG 11: Sustainable cities and communities)」でした。ホワチョン校の生徒たちからは，シンガポールでは日本と同じく高齢化社会，ゴミの問題など似たような問題をたくさん抱えていることやその対策，若者世代としての考えなどについて考えが提示されました。本校生徒たちも日本の状況や自分たちの考えを述べながら，シンガポールの状況と比較し（例えば，生徒からは『ゴミ袋の有料化など共通している政策もあったが，シンガポールではゴミでできた埋め立て地を活用していないようだった』という気づきがあった），高校生同士の国境を越えた意見交流は大変視野が広がるものとなりました。事後にも，お互いに贈り物をし合うなど、オンラインプログラムではありますが，とても有意義な体験となりました。

６．高校生国際フォーラム

2023 年度全国高校生フォーラムは，2023 年 12 月 17 日（日）に，国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）で，対面で行われました。

本校は，ポスターセッション（プレゼンテーション）に，「More women in the STEM field due to a new style of playing（人形遊びの改革～理工女子がどんどん増える、不思議なサイクルの第一歩～）」をテーマとして，ポスター掲示参加をしました。

日本において，女性の理工系分野への進学者が少ないことに対し疑問を持ち，その要因は，理工分野への自信における性差にあるのではないかと考えました。そこで，性差が確立するといわれる幼少期に，どのような遊び方をすると良いのかについて研究し，その成果をまとめました。



駒場らしい国際交流とは　―研究交流と文化交流―

１．駒場らしい国際交流とは

本校における国際交流は，研究交流を主眼とする台中市立台中第一高級との交流と，文化交流を主眼とする釜山国際高校との交流の２つに分けられる。一般的に国際交流というと，他者理解や異文化理解の文脈で実践されることが多く，本校でいえば後者の交流がそれにあたる。その一方で，言語や文化を超えて，共通する学術的知識・知的好奇心を元にした研究交流というのは，新しい国際交流の在り方とも言える。ここでは，この両者のプログラムを概観し，生徒の感想も踏まえながら，それぞれの特質を明らかにしてみたい。

２．台中市立台中第一高級との交流

①国際交流デイ（2023 年 5 月 23 日）

5 月 23 日（火），台中一中生徒 49 名と引率教員 3 名が来校し，4 年ぶりの国際交流デイが開かれた。午前中に歓迎セレモニー，授業参加，午後には研究発表会，近隣散策などで交流を深めた。授業では高 1，高 2 生徒の 100 名近くが午前・午後のバディ（お世話係）を分担し，校内の案内，授業での通訳を務めた。

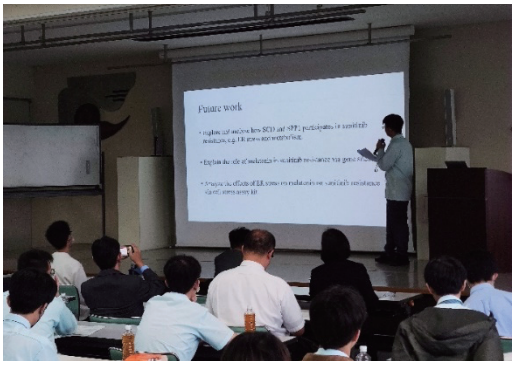
さて，先述したように，この交流の特徴はお互いの研究成果を発表し合う午後のセッション，研究交流にある。以下にそのタイムスケジュールを載せる。

Time	Title	Presenter(s)
12:30-12:45	Geometric Proofs of Theorems on Tangents	Takahiro OBA (Tsukukoma)
12:45-13:00	Investigations on the Role and Molecular Mechanism of Melatonin Inhibiting the Metastasis of Sunitinib Resistant Renal Cell Carcinoma	Daniel, Yeng-Fong, Lin (TCFSH)
13:00-13:15	Difference of the form between some species of damselflies and dragonflies	Hidemi HIGA (Tsukukoma)
13:15-13:25	**Short break**	
13:25-13:40	Sigma-1R agonist, Fluvoxamine, rescues MPTP-induced Parkinson’s Disease	Chu, Shao-Hsuan & Chung, Ching-Yu (TCFSH)
13:40-13:55	Origami Construction	Kazuki Ito (Tsukukoma)
13:55-14:10	Solving Community Administrator Abuse Issues with Blockchain Technology	Liu, I-Hsiang, Kung, Darren & Huang, Ting-Hao (TCFSH)

本校からは高校 2 年生の 3 名が発表したが，年度初めの 5 月ということもあり，課題研究の成果がまとまっているわけではなかった。部活等で個人的に研究を進めている生徒に声を掛け，その成果を発表してもらった。彼らの発表について，台中一中生から以下のコメントがあった。

- Takahiro OBA’s math presentation is cool, and I totally understand it. The topic is interesting that although I learn this theory, I don’t know how to prove it. / The math presentation was genius!

- It amazed me that Japanese students can conduct such interesting researches.
- The presentations of TCFSH are too difficult, but the presentations of Tsukukoma are interesting.



台中一中生の研究は基本的に大学の先生が指導教員として関わっており，学問的には洗練されているものが多い。すでに国際的な舞台で発表している生徒も多く，その発表は実に堂々としたものである。その一方で，本校生徒の研究は自身の興味・好奇心からスタートしており，研究としては粗削りであっても，その着眼点が魅力的である場合があると言える。

本校の生徒からは以下の感想があった。

- 英才教育の影響もあってか、彼らの語学力に圧倒的な凄さを感じた。お互いが知らない情報を英語を通じて共有するのはとても勉強になる機会だった。
- 台中一中の生徒のレベルが高くて驚きました。あとヨアソビが向こうで人気だそうで驚きました。
- 台中一中の生徒の英語力に圧倒された。研究発表は分からないところが多かったが、英語でのプレゼンがどのようなものかを知ることができた。実践的な英会話を通して、外国の人と外国語を使って意思疎通することの難しさと楽しさを肌で感じられた。

本校生徒も台中一中生の高度なプレゼンから多くの刺激を受けたことが良く分かる。海外の生徒が理解できないほどに高度なプレゼンテーションを行っているという事実こそが，彼らを知的に刺激しているようである。

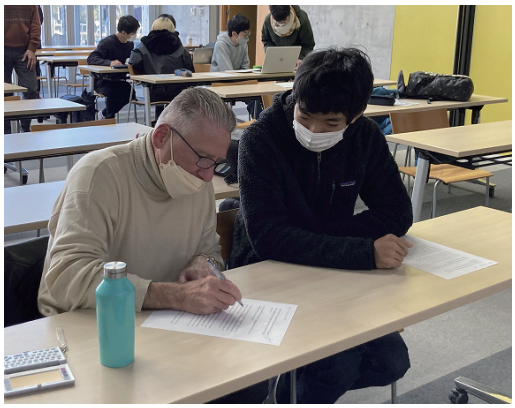
一方で，本校生徒の感想からは，もっと交流する時間が欲しかった，という声も多かった。今回は放課後に近くを散策する時間を取ったが，1 時間程度に限られてしまい，交流を深めるには不十分だったようである。台中一中との交流は研究交流がメインではあるが，バディ生徒と関わる時間がもう少し長く取ることができれば文化的な交流も深まるように思う。次回の課題としたい。

②台中一中訪問（2023 年 12 月 13, 14 日）

5 月に行われた国際交流デイから 7 か月後の 12 月には，本校の高校生 16 名が台中一中に訪問し，2 日間かけて交流を深めた。この訪問の大きな特長は，丸一日かけて行われる研究交流である。5 月に行われた研究交流をさらに発展させ，本校生徒から 5 本，台中一中生から 9 本の発表があった。この時期になると課題研究の成果が発表できるようになっており，理数系の研究をしている生徒にとっては自身の研究について英語で発表し，質疑を交わす絶好の機会になる。本校生徒の発表のうち 2 本は，課題研究（物理）の成果発表である（次頁の発表スケジュールを参照）。

2023. 12. 14 (Thursday) Schedule of the Courses (Lecture Hall Science Building B1)			
Time	**Subject**	**Topic**	**Presenter(s)**
8:50-9:00	Opening	Host: 王才和 Wang, Tsai-He、周聖博 Chou, Sheng-Po	
9:00-9:20	Earth Science	Planetary Boundary Layer(PBL):Controlling Factors and Association with PM2.5 (陳宥勳 Chen, You-Hsun)	TCFSH 2023 IESO
9:20-9:40	Math	Geometric Proofs of Trigonometric Formulas (石原颯大 ISHIHARA, Sota)	Tsukukoma
9:40-10:00	Engineering	Drug Repurposing with Graph Neural Network (李晏丞 Li, Yan-Cheng、邱德原 Chiu, De-Yuan、蔡孟廷 Tsai, Meng-Ting)	TCFSH
10:00-10:20	Physics	Elastic Energy of a Flat Spiral Spring (井戸沼悠成 IDONUMA, Yusei)	Tsukukoma
10:20-10:50	Poster Gallery I & Tea Time Science Building lobby 1F		
10:50-11:10	Engineering	An Efficient and Secure Color Image Encryption Algorithm Using a Dual Directional Rectangular Transformation and Hyper-Chaotic System (吳宥宏 Wu, Yu-Hung)	TCFSH
11:10-11:30	Math	A graphical proof of the sum of squares and cubes (平澤和磨 HIRASAWA, Kazuma)	Tsukukoma
11:30-11:50	Astronomy	Observation and Analysis of Stellar Magnetic Fields – Regularities in the Magnetic Fields of Main Sequence Stars (鄒孟熹 Tzou, Richard)	TCFSH
11:50-13:20	Lunch Break With Class 124 (Competency Classroom Science Building B1)		
13:20-13:30	Opening	Host: 田智崴 Tien, Zhi-Wei、謝時宇 Hsieh, Shi-Yu	
13:30-13:50	Physics	Blood Pressure Measuring by Ultra Wave (張嘉泰 Chamg, Chia-Tai、陳彥廷 Chen, Yen-Ting)	TCFSH
13:50-14:10	Physics	Dynamics of water bell (田中喜大 TANAKA, Yoshihiro、岩下佳生 IWASHITA, Kai)	Tsukukoma
14:10-14:30	Chemistry	Calcination Synthesis of GdxEr1-xB6 with Infrared Absorption and Florescence Emission Spectra Research (盧仁胤 Lu, Jen-Yin)	TCFSH
14:30-14:50	Chemistry	Conductive Hydrogel (劉彥緯 Liu, Yan-Wei，林裕鈞 Lin, Yu-Chun，鍾尚旂 Chung, Shang-Chi)	TCFSH
14:50-15:10	Break Time		
15:10-15:30	Biology	A Study on the Habits and Territorial Behavior of Formosan Blue Magpie (王歆宜 Wang, Hsin-I)	TCFSH
15:30-15:50	Technology	Umbrella Air -The End of the Era of Hand-Held Umbrellas (松村奏和 MATSUMURA, Soa)	Tsukukoma
15:50-16:10	Biology	Nutritional regulation mechanism of Machilus thunbergii galls (廖宥翔 Liao, Yu-Hsiang、陳宥彤 Chen, You-Tong)	TCFSH

参加生徒はこの日に向けて，11 月中に研究要旨を作成し，期末テスト期間にポスターとスライドを完成させる。そして，期末テスト直後から発表の練習に入る。今年度は 12 月 7 日，12 月 9 日，そして前日の 12 月 13 日にリハーサルを行った。12 月 9 日にはプレゼンテーション指導の専門家である Vierheller 氏をお招きし，スライドの出し方，ポインタの使い方，ジェスチャーの仕方など細かな点をご指導いただいた。



以上のようなリハーサルをして本番に臨んだが，改めて台中一中生の英語発表の質の高さに驚かされた。原稿を見ることなくマイクとポインタを持ちながら堂々と発表しており，質疑応答にもたじろぐことなく対応していた。

以下，このプログラムに参加した生徒たちの感想を一部紹介したい。

① こんなにも一日が濃かったのは何時振りでしょうか。別に日常がつまらない訳ではないし、むしろ学校生活は謳歌している方だと思います。ただ、知らない文化で、知らない言語で(英語は知っているべき、かもしれませんが)知らない人たちと交流することでこんなにも心が動かされるとは思いもしませんでした。

② 年を越した今も、何人かの台中一中生と SNS 上でやりとりを続けている。主に中国語を教わったり数学について話したりしている。このまま交流を続けて、科学コンテストで再会できたらと話しており、お互いに良い影響を受け続けていると感じている。

③ 大気境界層に関する発表では、大気境界層の上限と PM2.5 の濃度の関係から大気境界層の高さと大気汚染の関係性について説明がなされていた。英語で書かれており、グラフによる二つの関係が色分けによって詳しく明示されていたため、とてもわかりやすかったのが印象的であった。また個人的に気象について勉強しているので、内容にも非常に興味が持てた。

④ 時間が無かったので発表の練習は台湾に着いてからホテルで行い、そのまま発表本番を迎えた。発表の感触としては悪く無かった気がする。細かい数式の導出は説明していないが、現象がビジュアルで分かりやすいものだったからだと思う。とにかくやり切った感があって安心した。また、バディとお互いの研究について話せたのが大変刺激になった。（中略）台中の発表は、筑駒に比べて扱うテーマが高級なものが多かった。正直自分の英語力の無さにより地球物理以外の分野の発表は内容はあまり分からなかった。ただ、地球物理の発表に関しては、テーマは本格的ではあるが内容は割と基本的な分析にとどまっていた印象を受けた。

（＊下線部は筆者）

上記①で述べられているように，このプログラムへの参加が生徒に与える影響は多分にあると言ってよい。研究交流だけではなく，海外に渡航して，現地の高校生と交流をすること自体が生徒たちに与える影響は計り知れない。

②，③に書かれているのは，台中一中生の研究力の高さである。先述したように，向こうの研究は大学の先生が指導助言としてついているケースも多く，高度に専門的な内容であることがほとんどである。ただ，本校生徒にとってはこのレベルの発表が適しており，彼らが興味ある分野については，その内容を十分に理解できたよう

だった。

④の感想文も，研究交流の特質をよく表していると言える。台中一中との交流では，バディ生徒とはお互いの文化について話すだけではなく，それぞれの発表について議論することができる。これは双方の生徒が同程度の学術知識・興味関心を有しているからである。また，この生徒も台中生の発表を理解し，その分析内容に踏み込んだコメントを残している点も見逃せない。

以上のように，台中一中生との交流はその中心が研究交流であると言える。台中一中という高い学術水準を誇る姉妹校だからこそ，そのような特色ある交流ができると言えるだろう。

３．釜山国際高校との交流

①釜山国際高校来校（2024 年 1 月 25 日）

台中訪問の翌月 1 月 25 日には，韓国の釜山国際高校（BIHS）から 15 名の高校 1 年生が来校した。当日は歓迎会，東大散策，授業体験，部活見学，東京散策を実施した。このプログラムもコロナ禍の影響で過去数年はオンライン開催を余儀なくされていたが，今年は 2020 年以来 4 年ぶりに対面で開催することになった。以下が当日のスケジュールである。

	Time	Event	Activity	Venue
Jan25 (Thu)	9:15	Arrival	● Explanation of today's schedule	50th Anniversary Hall
	9:30-10:20	Opening Ceremony	● Welcome Greetings from Vice-principal ● Greetings from the Principal of BIHS ● Welcome Speech from student leader ● Greetings from student leader of BIHS ● School Introduction from Tsukukoma ● School Introduction & Cultural presentation & Performance from BIHS ● Performance from Tsukukoma ➢ Dance performance ➢ Juggling performance	Open Space
	10:30~10:50	Meeting with Buddies	● Self-introduction	50th Anniversary Hall
	11:00~12:30	Lunch	● Talking over lunch at the cafeteria of University of Tokyo	Cafeteria at Uni. of Tokyo
	12:40-13:10	Campus Tour	● Students: Campus tour with buddies	School building & school ground etc
	13:10~15:00 (5th & &6th period)	Class Audit	● Students: Class audit with buddies ● Teachers: Campus tour and class observation	Each classroom
	15:30-16:30	Club Activities	● Observe (& experience) club activities	School building & school ground etc
	16:30-17:00	Photo Session	● Take a group photo and prepare for the excursion	50th Anniversary Hall
	17:00-19:30	Excursion	● Tsukukoma and BIHS students explore the neighborhood and go back to the hotel at 19:30.	

このプログラムの特徴は文化的な交流にある。BIHS の生徒たちは理数系の研究に特化しているわけではなく，純粋に外国の文化や言語に興味を持っている場合が多い。今回来校した 15 名も第二外国語としてスペイン語やドイツ語を学習している生徒が多く，日本語を学んだ経験は無いものの，その国の言語や文化を積極的に学習し，体験しようとする態度が見られた。

最初の歓迎会は，両校からの文化的パフォーマンスの披露から始まった。BIHS の生徒は K-POP の

紹介のあとに自分たちで実際にダンスを披露してくれた。観客の本校生徒は手拍子と共に声援を上げ，会場内は大いに盛り上がった。本校生徒も歓迎の意味を込めて K-POP のダンスを披露し，これには BIHS 生徒も大興奮であった。このような積極的なパフォーマンスへの参加とその交流は BIHS 生徒の特徴と言える。

歓迎会後は国際交流デイと同じように，本校生徒が BIHS 生徒に 1 対 1 でつき（バディ制度），授業や散策を共にした。台中一中のときには研究発表の時間が設けられたが，今回は生徒たちが自由に会話できる時間を増やした。昼食は近隣の東大駒場キャンパスの生協でとることにし，その道中や食堂でも自由に会話できるようにした。また，放課後には東京散策を実施し，本校生徒が BIHS 生徒を連れて東京案内をしながら夕食をとり，最後は彼(女)らが滞在しているホテルまで送り届けた。学校内でもバディ生徒は常に一緒にいたため，彼(女)らはほぼ一日行動を共にしたことになる。

参加した生徒の感想を以下に載せる。

- ただ楽しかったです。もともと韓国には憧れていたので文化を直で感じられたなっていうのは思います。近いけど思っているより文化差も広くてさらに好きになりました。
- やって本当に良かった。今でも連絡を取り合っていて、英語という言語を学ぶだけで国境関係なく友達をたくさん作れるということに改めて気づかされた。
- 非常に貴重な体験だったのでやって良かったと思った。また、校外散策や会話が楽しかった。
- 話しているうちにだんだんと話が通じるようになっていったので良かったと思う。
- 僕の国際交流に参加する目的は、とにかく英語を使ってしゃべる機会が欲しいということなので、その面で見たらこの上なく適した企画だと思いました。バディという制度は強制的に何かをしゃべらなくてはいけない状況に追い込まれますし、その勇気さえあれば、自分のトーク力を鍛え、見分を広げられるいい機会になったと思います。

バディだけではなく，このプログラムに関わった多くの生徒から次年度も参加したいという感想を得た。バディ生徒がお互い楽しそうに交流している様子を見て刺激を受けたようである。学校内外で自由に交流できる時間を多く設けたことが良かったようである。

釜山国際高校の生徒も今回の交流に大変満足していたようである。ある生徒は本校に来校するまでうまく交流できるか不安に思っていたようだが，帰るときには満面の笑みで “Today was the best day ever.” と言っていた。彼らにとってもコロナ後の国際交流プログラムは特別な意味を持っていたようである。

②釜山国際高校訪問（2024 年 3 月 25 日～28 日）

釜山国際高校を受け入れてから 2 か月後の 3 月 25 日には，本校高校 1 年生 10 名，2 年生 3 名の計 13 名が釜山国際高校に訪問し，文化交流を深める予定である。ここに参加する生徒は 1 月の交流でバディを務めていた生徒のため，今回の訪問は相互交流の後半にあたる。現地での予定は以下の通り。

3/25 (月) 午後出校　夕方着　ホテルへ
3/26 (火) BIHS 訪問　終日
3/27 (水) 午前 KSA (Korea Science Academy) 訪問，午後は釜山観光
3/28 (木) 午前釜山観光，午後空港へ

1 月の交流と同じように，釜山では BIHS 生徒が本校生徒を市内観光に連れて行ってくれるようである。担当の先生と綿密に連絡を取り合い，生徒たち同士の交流時間が可能な限り多く取れるようにしたい。

４．まとめ　―研究交流と文化交流の両立―

ここまで駒場における研究交流と文化交流を概観してきた。本校生徒と同じような知的好奇心を持ち，切磋琢磨する仲間である台中一中生，そして，文化的パフォーマンスや自由会話を通して本校生徒を温かく受け入れてくれる釜山国際高校の生徒たち。生徒たちの感想を踏まえれば，どちらのプログラムも欠かすことはできず，また，相互に置き換え不能なものであることも明らかだろう。

ここで両方のプログラムに参加した生徒の感想を見てみたい。

- あんまり韓国のエンタメなどをよく知らない自分にとっては研究交流の方が話しやすかった気がする。
- 研究交流はやはりハードルが高いというかある程度知識がいると思いました。楽しくなくはなかったですが、英語での発表となると理解は難しかったです。（中略）釜山の文化交流はとにかく相手の文化について聞けるので本当に楽しいです。難しい英単語なしで会話を成立されられるのはハードルが低くて助かります。

それぞれのプログラムに特色があるからこそ，自分に合ったプログラムに参加すること求められる。コロナ禍によってその特色を継承する機会が少なくなってしまったが，今年度両方のプログラムで中心的な役割を果たしてくれた生徒が多くいる。彼らの体験談が一番の周知に繋がると思われる。彼らの頑張りに期待したい。

５．駒場の国際交流の今後

①研究交流の発展

現在の台中一中との研究交流では相互の発表活動がその交流の柱になっているが，長期的に交流を続けるには共同研究を実施することが理想的だと言える。本校には，過去に理系の課題研究において，台湾の学校と長期に渡って共同研究を実践した例がある。オンラインのテレビ会議を用いて両校の生徒が話し合いを繰り返し，夏に本校生徒が渡航し対面で共同実験を行い，帰国後にはオンライン上で実験結果をまとめて，最終的には研究成果を英語で発表した。オンライン会議が一般的になった現在では，以前よりもこのような共同研究を進めやすくなっていると言える。もちろん，教員の負担や渡航費の工面，研究発表機会の確保など解決すべき課題は多くあるが，検討する価値はあるように思う。

②英米の学校との交流

研究交流にせよ文化交流にせよ，アジア圏の学校だけではなく世界の学校とつながることは生徒にとって大きな刺激となる。ただ，渡航費が高騰している現在では対面での交流を新たに実施することは難しく，また，ビデオ会議を用いるには時差を考慮せねばならない。英米の学校と交流する際には，Padlet 等のオンラインプラットフォームを設け，そこで長期的にチャット・やり取りを行うことを視野に入れたい。2024 年度にはアメリカの高校との交流を試験的に始めてみたいと思っている。

③ホームステイの実施

相互の文化を理解するには現地の家庭に泊まり，現地の生活様式を体験することが一番である。国際交流を推進する多くの学校でホームステイプログラムは実施されており，釜山国際高校もその一つである。本校も体制さえ整えば今後実施できる素地があるように思う。実現に向けて話し合いを進めていきたい。

（文責：研究部国際交流係・英語科　阪田卓洋）

学校を起点に“共に生きる”を

1.　本校の国際教育の特徴

附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成 20 年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置以降、総合学科の柔軟なカリキュラムを活かした国際教育活動を展開してきた。2011 年のユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」及びその科目の設置、本校が主催する「高校生国際 ESD シンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成 26 年から 5 年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された。「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか」を生徒自身が考え、実践できることを重視した探究型の国際教育プログラムを展開してきた。

1946 年に地元の農業高校として発足してから 78 年、1994 年からは日本初の総合学科高校のパイオニアとして 30 年、2019 年からは WWL 拠点校として、地域と世界をつなぐネットワークを構築し、総合学科を生かした、グローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。2023 年 4 月には、国際バカロレア日本語 DP の 6 期生が入学した。本年度も最終試験を受験した生徒は、世界平均を上回るスコアを獲得している。

本年度は、コロナ禍以前とほぼ同様の活動を再開することができた。学校が起点となり、国内外の様々な人が行き交い、対面とオンラインのそれぞれの利点を活かした活動を展開することができた。コロナ禍で途切れたつながりをつなぎ直し、そして新たな出会いや連携のなかで、これからの国際教育のあり方を考える 1 年であった。

本報告では、筑波大学との連携により実施した２つの活動を中心に報告を行う。

第１２回高校生国際 ESD シンポジウムにおける JICA 筑波と連携した
「農業分野における国際協働活動へのユース参加促進」に関する分科会（2023 年 11 月 11 日）
（アフリカからの JICA 研修生、愛媛大学附属高等学校・埼玉県内農業高校の皆さんも参加）

2. 高大接続科目「国際農業研修Ⅶ」@インドネシアの開発

筑波大学は、SGH 指定校であった本校を拠点校とし、「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」を構想名とする内容で 2019 年度から 3 年間、WWL の指定を受けた。また、2022 年度からは筑波大学附属学校教育局が主体となり、WWL 事業のうち「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」を推進している。WWL 事業では、「将来、イノベーティブなグローバル人材を育成するため、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、高校生へより高度な学びを提供する仕組みを構築するとともに、テーマ等を通じた高校生国際会議の開催等や高等学校のアドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成」することが求められた。また、「国内外の大学等との連携により文理横断的な知を結集し、社会課題の解決に向けた探究的な学びを通じた高校教育改革や、大学の学びの先取り履修等を通じた高大接続改革を推進すること」が掲げられた。

本校は、SGH 事業として 2014 年度からインドネシアにおいて、「森林の保全」をテーマにした探究型の海外フィールドワークを実施してきた。本年度、筑波大学およびアジア最大級の製紙メーカーであるアジア・パルプ・アンド・ペーパーおよび、その日本法人であるエイピーピー・ジャパン株式会社と連携し、高大接続科目としての海外フィールドワーク（科目名：国際農業研修Ⅶ）を開発した。履修者の募集は、高校、大学、それぞれで行い、高校生 6 名、大学生は 8 名、合計 14 名が参加することとなった。研修の主な内容を表 1 に示した。前半（8 月 5 日まで）は、スマトラ島における APP の植林地の訪問、農村支援地域の視察、製紙工場（日本向けの製品も製造されている）、保護林、精英樹育種実験施設などを見学した。後半は、ジャワ島における実習を行い、おもに姉妹校との交流を行った。APP の製品は、日本にも輸出されており、実際に日本のホームセンターでも販売されている。APP の植林地における実習は、高校生、大学生ともに自己の消費生活の在り方と地球規模の課題をつなげて考えられる貴重な機会となった。後半は、本校の連携先との交流が中心のプログラムであった。連携校において、筑波大学の説明も行った。このような形で、高校と大学の連携が進めば、世界各国から筑波大学に留学を希望する高校生を発掘できるのではと考えられた。

表 1　国際農業研修の行程と主な研修内容

	主な内容
8月1日	・成田空港集合 ・ジャカルタへ移動
8月2日	・APP本社で、企業の環境への取り組みに関する解説 ・APP本社森林火災モニタリングルーム視察
8月3日	・APP社植林地、農村地域住民支援サイト、製紙工場等の見学
8月4日	・インドネシア環境林業省附属林業高等学校プカンバル校訪問 ・植林体験
8月5日	・ジャカルタへ移動
8月6日	・バンドンへ移動
8月7日	・インドネシア教育大学附属高等学校と国際連携協定に調印 ・高校生との交流会
8月8日	・ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校での交流会
8月9日	・グヌングデパンランゴ国立公園訪問 ・森林生態系管理官によるインドネシアの森林保護に関する講義、熱帯林フィールドワーク、被災地訪問
8月10日	・パクアン大学における講義聴講と研修の最終成果発表会

APP 本社にて（@ジャカルタ）

スマトラ島植林地における森林火災の訓練

製紙用木材を運搬するトラック

森林再生プロジェクト現場での植林実習

農村支援プロジェクト地視察

国際連携校における発表

3. SEA-teacher パイロットプロジェクトについて

SEA-Teacher プロジェクトは、東南アジア教育大臣機構 SEAMEO(Southeast Asia Ministers of Education Organization)が行う、各国大学間交換教育実習(Internship Program)である。 教員養成課程の中で重要な必修科目である教育実習を、東南アジア地域内で国境を越えて行っている。

SEAMEO における国内唯一の提携機関(Affiliate Member)である筑波大学には、当初より参加打診があり、2020 年 2 月に本校が協力校として日本ではじめて参画し、筑波大学国際局との連携によりパイロットプロジェクトとして実施した。COVID-19 の影響で、3 年間中断していたが、2023 年 2 月に再開し、2024 年 2 月に 3 回目の受入を行った。インドネシア、タイ、フィリピンの大学生の受け入れだけではなく、同じ時期に筑波大生も３か国に渡航し実習を行っている。

3 回目の受入となった今回も、これまでと同様に、インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルソン州立大学から受入を行った。参加学生は各２名、計６名であった。教科は、英語、理科、地歴公民であった。

グローバル人材の育成には、「グローバル人材を育成できる教員の育成」が必要不可欠である。学生時代に海外の学校で教育実習を行った経験のある教員は、学校現場においても各国の教員と連携を取りながら国際教育を展開することが可能となるであろう。

また、本事業は、参加した学生だけではなく、受け入れる高校の教員や生徒にとっても価値のある事業である。異なる国の異なる大学から坂戸に集い、助け合いながら異国の地で熱心に実習を行っている海外からの学生の皆さんの姿をみると、受け入れる我々自身も、日本における国際教育のあり方を熟考しなければと考えさせられる。今後、本校だけではなく、日本全国に本事業が広まっていくよう、本校での受け入れ経験を外部に積極的に発信していきたい。

2月6日に成田空港到着

校長による校内案内

はじめてのHRでの挨拶

はじめての授業（公民科）

研究大会における発表風景１

研究大会における発表風景２

５　2023 年度のおもな国際教育活動例一覧

タイ・カセサート大学附属高等学校から留学生（1 年間）を 3 名受入 （2023 年 4 月～2024 年 3 月）
台湾・高雄市立林園高級中学との交流会 （2023 年 5 月 23 日：生徒 32 名、教員 5 名来校）
筑波大学 AIMS プログラム留学生との交流会 （2023 年 6 月 3 日：ASEAN 諸国からの留学生 25 名、生徒 35 名参加）
東京国際大学留学生との交流 （2023 年 7 月 31 日：留学生 10 名来校、生徒 90 名参加）
高大接続先取り履修科目「国際農業研修Ⅶ」@インドネシア （2023 年 8 月 1 日～11 日：筑波大学生 8 名、生徒 6 名参加）
インドネシア教育大学附属高等学校と国際教育連携協定締結@バンドン （2023 年 8 月 7 日調印）
トビタテ留学 JAPAN および留学（1 年間）@インドネシア・ボゴール農科大学附属コルニタ高校 （2023 年 8 月：生徒各 1 名）
オーストラリア夏季研修プログラム@メルボルン、シドニー （2023 年 8 月 6 日～8 月 13 日：生徒 19 名参加、引率 2 名）
台湾（日本台湾交流協会より依頼）から留学生（1 年間）を 1 名受入 （2023 年 9 月～　）
筑波大学ウクライナ留学生の招聘 （2023 年 9 月 12 日：留学生 4 名）
筑波会議 2023 における ASEAN-日本の友好協力 50 周年記念に登壇@つくば （2023 年 9 月 28 日：生徒 3 名、教員 1 名）
インドネシア・ジョクジャカルタ国立第一高等学校受入 （2023 年 10 月 3 日：生徒 20 名および教員来校）
第 12 回高校生国際 ESD シンポジウム・The 5th SDGs Global Engagement Conference @ wherever you are（2023 年 11 月 11 日：海外校 6 校、国内 6 校参加）
イオン１％クラブティーンエイジアンバサダープログラム参加@日本&ベトナム （2023 年 11 月 13 日～18 日：日本プログラム、2024 年 1 月 14 日～21 日：ベトナムプログラム、生徒 10 名、教員 2 名）
第 3 回 SEA-teacher パイロット事業受入 （2024 年 2 月 6 日～3 月 5 日：インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルゾン大学　教育実習生各 2 名計 6 名）
第 27 回総合学科研究大会における茨城県立土浦第一高等学校校長プラニク・ヨゲンドラ氏講演会 （2024 年 2 月 10 日：外部参加者約 120 名、保護者約 70 名、生徒約 350 名参加）
オーストラリア春季研修プログラム@西オーストラリア （2024 年 3 月 24 日～4 月 2 日：生徒 32 名・引率 2 名参加予定）

６　生徒の変容について

本年度開発した「国際農業研修」に参加した生徒は、この研修経験が進学先の決定に大きな影響を与えたと、事後のふりかえりで述べている。「国際」や「グローバル」というものへの心理的な障壁は、学校現場において日常的に国際教育が実践されることで、かなり低減されているようである。そして、その経験は、生徒のキャリア選択にも影響を及ぼすことがここ数年の研究で見えてきている。今後も、継続的に生徒の変容についてとらえていきたい。

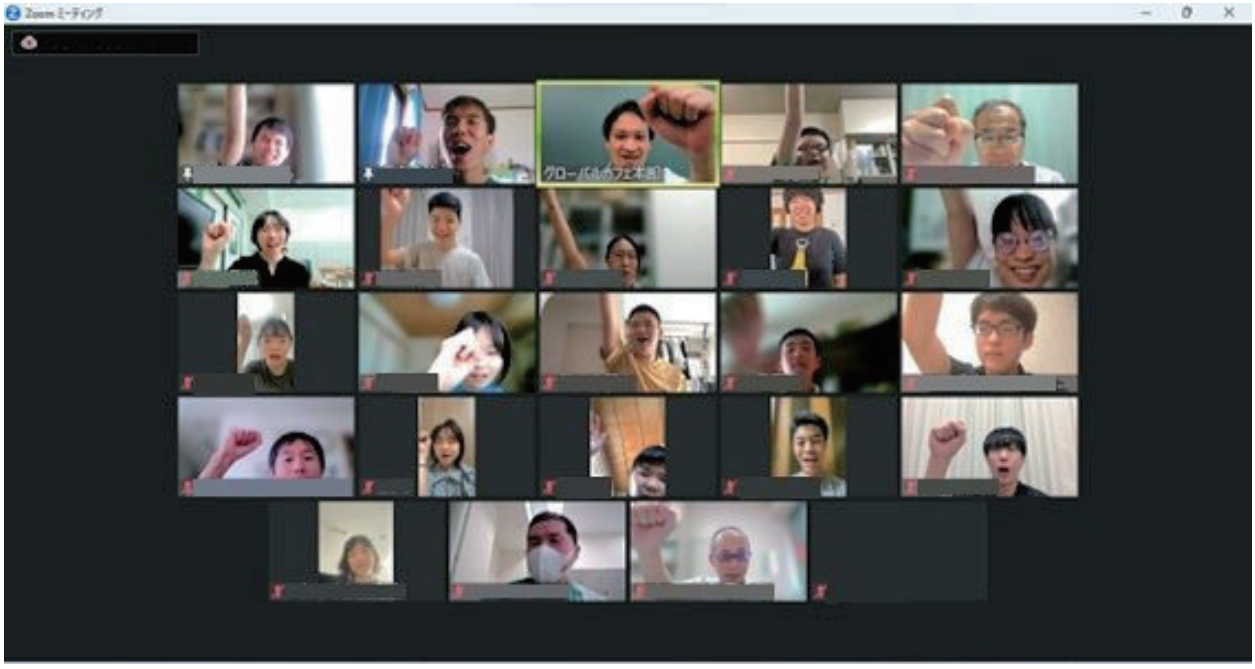
視覚障害教育における「せかい×まなびのプラン」に向けて

1．本校の国際教育の状況

2023 年度の本校における国際教育は、前年度からの取り組みを継続し、充実したものにすることができた。2022 年度から始めたグローバルカフェ 2023 では、中学部・高等部の生徒を対象に、本校音楽科の卒業生がドイツやオーストリアでの留学について具体的なエピソードを盛り込んだ講演をした。また、2022 年度の高等部卒業生２名がタイへの留学について報告した。どちらの講演も在校生に大きなインパクトを与えていた。また、高等部では、2024 年度にタイへの留学を目指す生徒中心に、視覚障害のあるタイの高校生徒とのオンライン交流会を実施し、お互いに自国の文化を紹介した。小学部では、インターナショナルスクールとのビデオレターを用いた交流、鍼灸手技療法科留学生との交流会を実施した。オリパラ教育では、小学部・中学部での卒業生パラアスリートとの交流、高等部での二人乗りタンデム自転車を通じた附属駒場高校との体験会を開催した。専攻科では、引き続き留学生の受け入れやインドへのマッサージの指導協力を行った。今回の報告には含めていないが、2024 年３月には、教員１名が国際交流協定を結んでいるタイの CFBT を訪問し、2024 年度の留学生の受け入れや今後の両校の生徒・教員の交流に向けた検討を予定している。

2024 年度も、上記の活動を継続・発展させながら、視覚特別支援学校のナショナルセンターとして、また視覚障害教育専門機関としての国際的な役割を担うセンターとして、多くの卒業生の力も借りながら、視覚障害教育における国際教育活動を推進していきたい。

（文責：青松利明）



グローバルカフェ 2023 の様子

２．グローバルカフェ 2023 を開催

昨年度に引き続き「将来、留学したい」「異文化に関心がある」「海外で生活する方法を知りたい」「国際的に活動する先輩の話を聞きたい」と希望する生徒を対象に、中学部・高等部国際教育推進委員会は夏休みを利用し、本校卒業生で海外に留学経験のある方３人からお話を伺う企画「グローバルカフェ 2023」を開催した。当日は中学部生徒６名、高等部生徒（専攻科生徒含む）９名、教職員７名が参加した。(2023 年７月 31 日にオンラインで実施)

講演者氏名	講演者の紹介及び講演テーマ
café１　K.S.さん (2010 年度高等部卒)	ドイツとオーストリアで視覚障害者の教育環境や福祉支援について学び、声楽家として活動している方 「～人と人と～欧州諸国の視覚障害者教育から学んだこと」 ・留学の決め手はダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業 ・ドイツ　ニュルンベルクで初めての海外生活（ニュルンベルク盲学校） ・オーストリア　ウィーンの生活（ウィーン音楽院／ウィーン国立音大） ・オーストリアの視覚障害者支援とは ・欧州各国の視覚障害者教育を幅広く学ぶ
café２　K.K.さん S.T.さん (2022 年度高等部卒)	トビタテ！留学 JAPAN でタイの盲学校やインクルーシブ教育で学ぶ 現在、大学１年生 「その涙の原因は？辛さか悲しさか？～あの２週間いったい何があったのか」 ・タイ　コンケンに留学　CFBT（タイ視覚障害者支援クリスチャン財団）及び Khon Kaen School for the Blind（コンケン盲学校） Khon Kaen Wittiyayon School（インクルーシブ教育校） ・日本の特別支援教育・支援制度と海外との違いや実態を学ぶ ・留学前　日本の文化の何を紹介しよう？ ・留学中　異文化体験でお腹いっぱい！ ・タイと日本の違い（生活、インフラ、教育など）

café１への感想

・視覚に障害があっても１人で全て手配して、白杖片手に出かける、私もいつかそれができるようになりたいと、勇気をもらえました。(高１　S.C.さん)

・言葉が通じなくても伝えようとする思いや愛嬌というのに、すごく共感を覚えました。留学で文化や言葉は違っても、あなたと友達になりたい、自分を知ってほしいというような気持ちを伝える事は、人と人との関わりという原点に立った時にとても大切だなと感じました。留学というと、とてもハードルが高いものに思えますが、K.S.さんのお話を聞いて、挑戦することや楽しむことなどの大切さを感じ、自分も挑戦しようという気持ちを持ち続けようと思いました。(高３　K.S.さん)

café２への感想

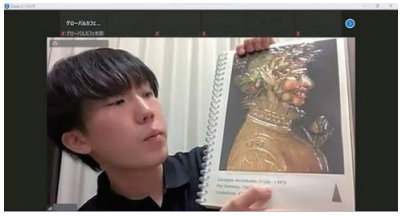
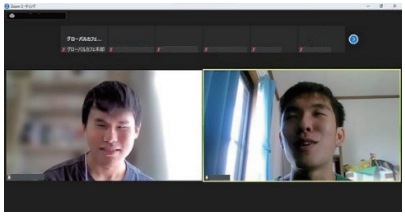
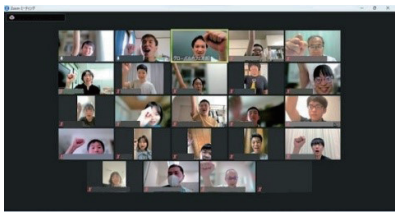
・言語でのコミュニケーションがほぼ取れない中でも、苦労や困難を乗り越えて、人とのより深い絆や交流を結ぶ経験はとても素晴らしいことだと思いました。大変だとは思うけれども、自分もそのような経験を一度はしてみたいです。(中３　W.K.さん)

・海外に行って異文化に触れることはとても大切なことですが、それに加えて、日本の文化を海外の人に紹介できるようにしておくことも重要だと思いました。海外へ行くための準備をするとなると、どうしても現地の言語や文化などを勉強することに意識がいってしまいがちですが、現地の人に日本のことを分かりやすく伝えるための準備をしておくと、現地の人との交流の場を充実させることにもつながるので、改めて日本の文化と向き合ってみることも大切だと感じました。(高３　I.N.さん)

Café 全体への感想

・３人とも英語やドイツ語、タイ語があまり出来なかったと聴いて、留学先の言葉が完璧でなくても多くの経験が積めることを知れた。語学が苦手な私にも留学できるかもと思った。(中２　T.M. さん)

・私は留学に関心がありましたが、どういう感じなのかなどイメージがうまくつかめていませんでした。今回実際に留学された方からお話が聞くことができ、イメージをつかむことができ、自分も高校生のうちに留学に行けたら、行きたいなと思いました。(高１　K.M. さん)

グローバルカフェ 2023 の様子　　(文責：佐藤北斗)

３．高等部　タイとのオンラインによる交流会について

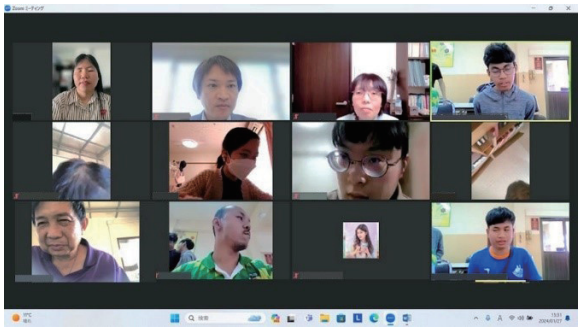
本校は、2020 年にタイ視覚障害者支援クリスチャン財団（以下、CFBT）及び管理下の盲学校と国際交流協定を締結して以来、高等部では定期的にオンラインによる生徒同士の交流会を行っている。本年度は、日本とタイの文化の共通点や違いについて学ぶことで国際感覚を身につける機会とすることなどを目的に交流会を実施した。(2024 年１月 27 日にオンラインで実施)

CFBT からは Khon Kaen School for the Blind（コンケン盲学校)、Nakorn Ratchasima（ナコーンラーチャシーマー盲学校)、Khon Kaen Vocational College for the Blind（コンケン職業訓練校）から計９名の生徒が、本校からは高等部１年生３名の計 12 名が参加した。

以下は、交流に参加した本校生徒の感想の一部である。(　　）内は生徒の学年と氏名をイニシャルで示す。

・タイとの交流会を通して、日本との文化の違いや似ているところを垣間見ることができたと感じた。例えば、違うところであれば、「タイ正月」。日本では寒い１月に行われるが、タイでは最も暑い４月に「水かけ祭り」を行うということ。似ているところであれば、「ロイカトーン」。これは、日本の「灯篭流し」になるそうだ。留学先では、もっとタイの人たちと関わり合いながらタイの文化に触れて「自分のタイ」を見つけていきたいと思った。次のオンライン交流会では、挨拶などタイ語を少し覚えてみたいと思った。(高１　K.M. さん)

・タイについて、初めてタイ語を聞くことができたり、タイのお祭りや食文化、音楽などについて詳しく知ることができた。すごいなと思ったり、びっくりしたり、たくさんの発見があって、実際に現地で文化を体験してもっと知ってみたいと思いました。日本についても紹介したことだけではなく、たくさんの内容の質問をタイから頂けてとても嬉しかったです。また、海外の人が日本についてどんなことを疑問に思うのかも知ることができて、新鮮な体験ができてよかったと思います。(高１　M.M. さん)



CFBT とのオンライン交流会の様子

(文責：佐藤北斗)

４．小学部の活動について

（１）西町インターナショナルスクールとのビデオメッセージによる交流

今年度小学部４年生が、西町インターナショナルスクールの４年生と交流を行いました。

まず、西町インターナショナルスクールの子ども達から自己紹介動画が送られてきました。動画では英語と日本語で名前と家族構成、好きな物などを紹介がありました。好きな物の話題は共感できるところがたくさんあり、とても盛り上がりました。本校児童が気になったのは、髪や目の色、髪型のことでした。茶色や金色の髪、青い目、ウェーブのかかった髪などの説明があり、髪も目も黒色だと考えていた児童達は、世の中には色々な人がいるのだと驚いたようです。

Nancy 先生から英語の表現を教えてもらいながら、本校からも英語と日本語で自己紹介動画を送りました。自分達の英語がきちんと伝わったのか心配していましたが、返事が届き、上手だとほめてもらって喜んだりほっとしたりしていました。

また、児童の自己紹介に対しての質問が届いたので、その返事を考えました。西町インターナショナルスクールの子ども達の中には、全盲児がどのようにピアノを弾くのかや点字を読むことは難しいかなど、視覚障害に関係する質問があり、お互いのことを知る良いきっかけになったと思いました。今年度は、対面での交流は叶いませんでしたが、今後もこの交流が続いてほしいと思っています。

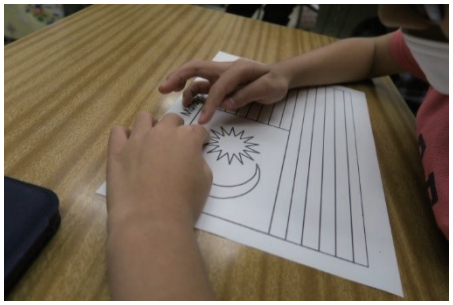
（文責：佐藤　加代子）

（２）小学部５年生と鍼灸手技療法科留学生との交流会

小学部５年生７名が、マレーシア出身の専攻科留学生と交流を行いました。５年生の児童は、この日にむけて、「総合」の時間にマレーシアについて学習してきました。どこにある国なのか地理的な位置を知らない児童がほとんどだったため、地図や地球儀を使って確認し、その後図書室の本やタブレットを使って調べ学習をしました。具体的には、①どんな人が住んでいるか（マレー系、中国系、インド系）、②気候・生活について、③食べ物・宗教について、④言葉について、⑤産業や観光地について、⑥伝統工芸について、それぞれ調べ、わかったことを全員で共有しました。学習が進むにつれ、「○○について聞いてみたい。」「留学生の方は何系の人かな？」「ナマ　サヤ　の後に自分の名前をつけたら、自己紹介になるんだって！」と、交流への期待が高まっていきました。

当日の交流では、立体コピーのマレーシアの国旗を一人一人に渡してくださり、国旗に描かれている絵や色彩の意味につて説明してくださいました。全員興味津々で手元の国旗を触りながら聞いていました。暑い国で年中半袖とサンダルで過ごしていること、ドリアンやマレー料理の説明、産業や建物などについて教えて下さり、風土や文化の違いを感じていました。また、正装の服を持ってきてくださり、一人ずつ触ったり、肩にかけさせてもらったりしました。児童からの「マレー語で何か話してください」というリクエストに応えてくださり、自己紹介をしてくれました。初めて聞く生の言語にみんなじっと聞き入っていました。最後に「ありがとう」をマレー語では「テリマッカシ」と言うことを教えてくださり、お互いに「テリマッカシ！」と言い合いながら交流の時間を終了しました。

校内で他国の生の言葉や文化に触れる機会を設けることができ、大変貴重な時間となりました。この交流によって、子どもたちの世界へ向ける目が広がったことと思います。



児童が立体コピーの国旗を触る様子

留学生の話を聞いている様子

（文責：塚田　理恵）

５．専攻科の国際教育活動

（１）留学生プロジェクト

毎年２名までの外国人留学生を鍼灸手技療法科に受け入れ、日本人生徒と同様３年間の鍼灸手技療法教育を行って国家資格（はり師、きゅう師、あん摩マッサージ指圧師）取得の上、現地における同教育普及の指導者を育成する本プロジェクトでは、今年度も２名（台湾、マレーシア）の留学生を受け入れた。留学生の日本語運用能力に配慮し、座学に関しては日本人とはクラスを分けた留学生特別クラスを設け、平易な日本語で繰り返し丁寧に説明しつつ日本語能力の向上も図り、来たるべき国家試験（日本語で行われる）に備える。実技科目に関しては日本人と共に学ぶクラス編成で、なるべく多くの生徒とペアを組んで練習し、多様なタイプの患者への対応を目指す。日本語学習と並行して現代医学、東洋医学を学ぶ留学生の学習量は極めて多く、寄宿舎の自室に帰ってからも１日の時間の大半を勉強に費やしているが、その真摯な学習態度や実技習得に対する熱意が日本人生徒に与える影響も大きい。日本の盲教育における鍼灸手技療法の歴史は長く、世界初の障害者向け公教育として約 350 年の歴史があるが、歴史が長いだけに日本の視覚障害者生徒にとっては「あることが当然」として有難みを感じられないケースも多く、入学時のモチベーションは必ずしも高くない場合が多いが、留学生がわざわざ日本語を習得し、外国である日本に３年間住みながら必死に鍼灸手技療法を習得している姿に感化され、共に学びながら国際教育拠点事業への興味を持つ例も多い。

（２）小学部生徒と留学生の交流

これも毎年行っているもので、１２月上旬に鍼灸手技療法科の留学生が小学部の教室に出向いて１時間ほど、自国の文化などを日本語で紹介する。今年はマレーシアからの留学生のファイズさん（男性）が、マレーシアの気候、食べ物、文化などを紹介し、持参した民族衣装をみんなで触って形を確認した。小学生たちからも、マレーシアの伝統的な遊びやおもちゃなどに関して活発な質問があり、同じ学校に外国からの留学生がいるということを初めて知った驚きと共に興味津々で参加していた。

（３）インド共和国の視覚障害者職業教育支援

２０１３年から２０１６年まで、鍼灸手技療法科がＪＩＣＡ草の根支援事業として実施した本活動は、日本の盲学校でのあん摩マッサージ指圧教育をアジア各国に移植する事業のモデルケースとして始められたものであり、日本では３年間で行っているあん摩マッサージ指圧教育を、内容を厳選して２年間で行うものとし、カリキュラム、シラバス、教科書、教具、教育環境の整備及び教員教育を日本側が行い、ＪＩＣＡ事業後は本校の指導のもと、インドのモデル校が自力で日本式手技療法（あん摩）教育を継続し、卒業生に対して筑波大学附属学校教育局からの修了証が発行されるというものである。

２０１６年以降は毎年、鍼灸手技療法科教員がインドを訪れて教育現場の視察及び技術指導等を行ってきたが、コロナ禍により２０２０年から２０２２年までは現地訪問を中止せざるを得ない状況であった。コロナの収束が見えた今年度１２月、鍼灸手技療法科教員が３年ぶりにインド、アーメダバードのモデル校である National Association for the Blind, Ahmedabad Branch(別名 Blind People's Association)を訪れ、現地の責任者（Director 及び General Secretary）との会談、卒業生への教育長発行の修了証の授与、全学生の実技チェック、現地教員の座学及び実技の指導法チェックを行った。責任者との会談では、今後の継続的、発展的な活動の為に、ＪＩＣＡ事業時に作成した覚書（Memorandum of Understanding）を改訂し、今後の活動における各施設の役割を明確にして日本側とインド側の責任者が署名し直すことや、今後本校と当施設との関係を強化していくことなどを話しあった。学生の実技チェックや現地教員の指導法チェックでは、コロナ禍で数年間、日本人教員の現地訪問が出来なかったにもかかわらず、教育の質、生徒の技術、生徒のモチベーションともに高いレベルが維持されていることが確認された。

写真１　インド人教員の座学指導

写真２　教育長署名の修了証授与

写真３　インド人生徒（２年生）

写真４　インド人教員の実習指導

（文責：寺崎　直）

６．オリンピック・パラリンピック教育活動報告

（１）活動報告

令和５年度の実践は①小学部児童向け水泳教室②中学部３年生向けブラインドサッカー交流③附属駒場高校との交流事業の３つに取り組んだ。

①パラアスリートとの交流を通じて学ぶ、スポーツがうまくなる「コツ」：小学部児童向け水泳教室

本校のオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）では初の試みとなる「水泳」を題材とした交流を実践した。講師として卒業生で東京パラリンピック・金メダリストの**木村敬一選手**（高等部普通科卒）と東京パラリンピックで悲願の初出場を果たした**石浦智美選手**（高等部普通科卒）を招いた。交流は二部構成とし、前半に選手お二人との対話形式による交流、後半は実際にプールに入って泳ぎのレッスンを行った。木村選手の金メダルを一人一人じっくりと観察する時間もあり、メダルの重さや質感を触って感動する様子が印象的だった。泳ぎのレッスンでは基本となる水中姿勢を一人一人に丁寧に指導してくださり、最後にリレー形式でパラリンピアン達と一緒に泳ぐことができた。児童たちからは「メダルを触ったのは初めてだったので、重いことが分かって、いい経験になりました」「１０数えてから木村選手がスタートしたのに、（木村選手が）先に着いたのに驚きました」という感想も見られ、普段の授業では味わうことのできない特別な体験をすることができた。

写真左が木村敬一選手

写真中央が石浦智美選手

②パラアスリートとの交流を通じて学ぶ、スポーツがうまくなる「コツ」：中学部３年生向けブラインドサッカー交流

中学部では３年間の体育実技の中でブラインドサッカーに取り組んでおり、最終学年となる３年生ではまとめとして、今年度はオリパラ教育も兼ねた形で本格的なブラインドサッカーを体験する授業を展開した。特別授業に向け、実際の競技でも使用されるサイドフェンスを使用した実技を行ったり、試合形式（二方向に攻守がある形）を行ったりしてゴール型の特徴の一つである「ボールの奪い合いから発生する攻守の切り替え」を体験し、ブラインドサッカーの楽しさをさらに感じさせることができた。今回、講師として男子日本代表で卒業生の**鳥居健人選手**（高等部専攻科鍼灸手技療法科卒）をお招きし、トップカテゴリーで活躍する選手の身体感覚を学んだり、プレーを間近で見たり、実際に対戦して肌で感じることができ、ブラインドサッカーの理解を深めることができた。生徒たちからは「声の方向に正確に行ってきれいにシュートを決められていたので自分も見習いたいなと思いました」「ドリブルがとてもうまくて人一倍努力して練習しているからこそ上手なんだと実感し、自分も何かに向かって頑張っていきたいと思いました」とあり、卓越した技能の背景には多くの時間と熱意に裏打ちされたものであることを理解できた様子だった。

写真上段中央が鳥居健人選手

生徒２人と対戦する鳥居健人選手

③附属駒場高校との交流事業　～タンデム乗車体験会を通じて～

高等部１・２学年対象に、附属駒場高校(以下駒場)との交流事業の一環で、タンデム(２人乗り自転車)乗車体験会を日本パラサイクリング連盟に協力いただき実施した。体験会前半はパラサイクリング連盟関係者と生徒ペアで、後半は生徒同士のペアでタンデムに挑戦した。走行中は、前後のペダルが連動して動くので、息を合わせるためにも自然と会話が生まれていた。また互いに協力し、風を切る気持ちよさを共有することで交流がさらに深まり笑顔で走行する様子が見られた。現役で国際大会でも活躍されている**木村和平選手**（楽天ソシオビジネス株式会社所属）も体験会に参加いただいた。「普段は体験できない速度と風を体感できた」や「今度は大きな公園や自然の中を走ってみたい」という附属視覚の生徒からの感想、「アイマスクをしてストーカー（後席者）として走行し、見えない世界を体験したことが、パイロット（前席者）でペアに声掛けする際に活きた」という駒場生徒の感想から、双方にとって充実した時間になったことが伺える。

競技用タンデムを触察する生徒

駒場、視覚生徒ペアでタンデム乗車

(文責：鈴木隆将、山本夏幹)

音声、文字、手話、非言語をフル活用！異文化コミュニケーション

１．本校の国際教育の特徴

本校における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流・オンライン交流や海外企業との連携、海外からの来校者受け入れを通して、児童生徒の国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指すことにある。また、卒業後、国際教育推進事業の経験を活かして広い視野に立ち、社会で活躍していくことを期待して実施している。

現在、中学部、高等部普通科、高等部専攻科では、継続的に次の学校と交流活動を展開している。

中学部：韓国国立ソウル聾学校との交流　［2014 年～］

高等部普通科：フランス国立パリ聾学校との交流　［2003 年～］

高等部専攻科：台湾の聾学校との美術作品交流　［2017 年］

２．中学部の交流　【韓国国立ソウル聾学校との交流】

本校中学部では 2014 年度より韓国国立ソウル聾学校（以下、ソウル聾学校）とオンライン交流を行っている。2015 年度に３年間の国際交流協定を締結し、2018 年度にはソウル聾学校の教員、生徒が来校した。その後、５年間の協定締結の更新を行い、ソウル聾学校中学部の生徒と本校中学部１年生が交流を行ってきた。新型コロナウイルス感染症の世界的な流行による２年間の中断があったが、2023 年度には３年ぶりにオンライン交流を行うことができた。

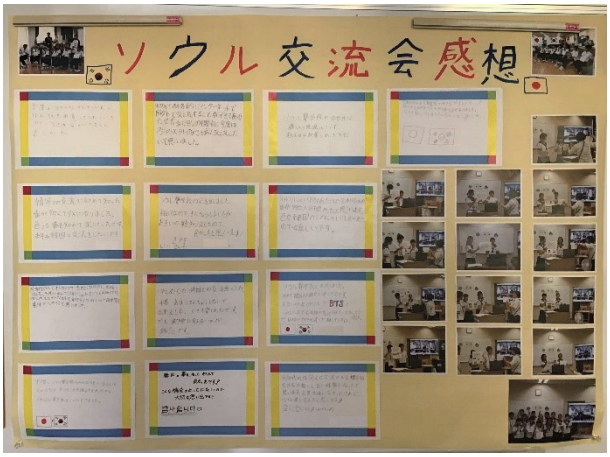
今年度は５月末に国際交流協定の期限を迎えたため、インターネット上で電子ファイルを交換する形で２回目の更新手続きを行い、その後、７月にオンライン交流を実施した。

交流を始めるにあたり、上級生から１年生に向けて前年度の交流の様子の報告や助言を行い、生徒たちが交流のイメージをもてるようにした。交流の準備では、はじめに韓国の地理や文化、韓国語、そしてソウル聾学校について学習し、韓国語による自己紹介の練習やハングル表記の名札の準備、ソウル聾学校から寄せられた質問への回答準備などを行った。質問への回答では、話す文章を日本語で考え、それを翻訳ソフトで韓国語に直した。質疑の内容については、国や学校のことは双方の事前学習に含めるようにし、当日の質疑ではできるだけ生徒達自身の関心が高い内容を扱うようにした。具体的には、使用している教科書や放課後の過ごし方、生徒達の間で人気があるスポーツ・映画・芸能人・ゲーム・漫画などを取り上げた。また、お互いの国の文化について質問する際は一般的に有名なものをたずねるのではなく、韓国で人気がある和食、ソウルの生徒が知っている日本語の言葉、日本と聞いて思い浮かべることは何か、日本で行ってみたい観光地、お勧めしたい韓国の観光地というように、自分たちと相手の国のつながりを意識した質問をするようにした。

当日は、最初こそ緊張した様子も見られたが、事前に準備していた 20 あまりの質問について、文章だけでなく、写真や実物を準備し、質疑応答を行うことができた。また、後半は日韓それぞれの指文字を教え合うなど、和やかな雰囲気で交流を行うことができた。

事後アンケートでもほとんどの生徒が「とても楽しかった」あるいは「楽しかった」と答えており、「日本のアニメやマンガが韓国でも人気があることを知り嬉しくなった」、「手話が似ていて分かりやすかった」などの感想があった。

また、十分に準備できたことにより「安心して話せた」、「お互いに分かり合えた」という生徒がいた一方で、「もっと自由に話してみたかった」という生徒もいたので、今後はよりリアルタイムで自由にコミュニケーションが行えるよう、支援方法を検討し、より活発な交流ができるよう改善していきたいと考えている。　（文責：廣瀬由美）



【ソウル聾学校とのオンライン交流の様子】

３．高等部普通科の交流【フランス国立パリ聾学校との交流】

本校高校部とフランス国立パリ聾学校（以下、「パリ聾学校」）との交流は、2003 年の姉妹校協定の締結から始まった。2013 年には、オンラインによる交流が取り入れられた。はじめのオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、寄宿舎を利用していない通学生はこの交流に参加することができなかったため、2016 年度からは放課後の時間を利用してオンライン交流が行われるようになった。2019 年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、現地に訪問する対面での交流を行うことができず、代わりにオンラインでの交流のみを実施していた。2023 年５月に、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、季節性インフルエンザと同等の「５類」へと移行されたことを受け、５月 16 日に本校にパリ聾学校の生徒と教員を招き、対面型の交流を実施した。また、11 月にはコロナ禍の間も続けられていたオンラインによる交流を実施し、計２回の交流が行われた。

（１）交流の実施

①　高等部普通科１年生との交流

１年生は体育館を使用し、鬼ごっこや手話クイズ等のレクリエーション活動を行った。パリ聾学校の生徒の中には、「鬼」という日本特有の概念に興味を示し、手で鬼の角を表しながら参加する姿も見られた。その後、２つのグループに分かれ、それぞれ「日本の文化」と「日本の手話」の紹介を行った。「日本の文化」のグループでは、けん玉やお手玉を体験したり、本校の生徒が空手をパリ聾学校の生徒に披露し、基本的な空手の動きを一緒に練習したりした。

【高等部１年生とパリ聾学校生徒との対面交流】

②　高等部普通科２年生との交流

２年生は「ジェスチャーゲーム」、「ワードウルフゲーム」、「イラスト伝言ゲーム」を行った。英語、フランス語、日本語をホワイトボードに書き、相手に伝わるように工夫しながら、コミュニケーションをとっていた。また、iPad やスマートフォンで伝えたい画像を調べて見せたり、翻訳アプリを用いたりして、ICT を積極的に利用する生徒もいた。交流終了後、２年生の教室で昼食交流を行った。各学級にパリ聾学校の生徒が１～２名入り、会話を楽しみながら昼食をとる様子が見られた。

③　高等部普通科３年生との交流

３年生は「パリ聾学校のゆるキャラを考える」をテーマに、本校生徒とパリ聾学校の生徒が共同制作を行った。全体の企画や運営は、学年会役員（学年長、副学年長、書記、会計、議長）が中心となって進めた。司会・進行は学年長が担当した。また、学年会役員がゆるキャラについての説明を英語で行った。説明には、事前に作成した英語のスライドを投影し、さらにフランスの手話表現をつけて行った。交流では、パリ聾学校の生徒が１人ずつ入った５～６人のグループに分かれて話し合ってキャラクターを作成し、みんなの前で発表をした。話し合いは、グループのメンバーが車座になり、中心に筆談用の模造紙を置いて行った。アイデアを出し合った後は、事前に配布された２枚の画用紙に、

【高等部２年生とパリ聾学校生徒との対面交流】

それぞれゆるキャラのイメージ図と、イメージ図に込めた意味やコンセプトのキーワードを書くようにした。完成した２枚の画用紙をもとに、各グループ１～２分間でプレゼンテーションを行った。最

後に、投票を行い、優秀賞を決定した。投票は生徒だけでなく、参加した教員も行った。優秀賞には、パリを象徴する動物であるニワトリを頭部にもち、胴体はエッフェル塔をモチーフにしてデザインされたキャラクターが選ばれた。優秀賞に選ばれたグループには、学年長から賞状が贈られた。

④　オンライン交流

11 月に行われたオンライン交流には希望者 11 名（１年生３名、２年生６名、３年生２名）が参加した。パリ聾学校の生徒から、「For sport lesson you have all the same t-shirt and short?（スポーツをするときに同じみんな服を着るの？）」「Why do you have all the same clothes?（どうしてみんな同じ服を着るの？）」という質問がされた。この質問に対して、本校生徒同士で話し合い、「That's right. Because it is Japanese culture. Japanese students have to wear same clothes because it is determined by school regulations.（そうだね。それは日本の文化だからだよ。日本には同じ服を着ることが校則で決まっているんだよ。）」と説明していた。一人の生徒だけで答えるのではなく、友達の発言に対して、一文ずつ補足していくようにし、複数の生徒で協力して回答する姿が見られた。

（２）まとめ

対面型の交流でパリ聾学校の生徒と最も深く関わった３年生に感想を尋ねた。「グループでの話し合いで INJS の文字とパリの名物を取り入れたキャラクターをつくることができました。パリの名物をいくつか候補を上げてどんなキャラを作るのかを考えながら話し合うことができたのはとても良い経験となりました。相手に伝えようと懸命にジェスチャーをして、パリ聾の生徒が大きく頷いてくれたとき本当に嬉しく感じました。お互いが分かち合えたことで初めて親密になれるのだなと分かりました。」、「パリ聾の生徒と交流し、とても刺激的な体験になりました。まず、言葉の違いからくるコミュニケーションの壁を感じましたが、お互い英語を使いながら手話でコミュニケーションをとることができました。フランス語も一部勉強になりました。また、文化の違いや生活環境の違いにも触れることができ、どのような魅力や習慣を持っているのか知れば知るほど楽しく感じました。」と国際交流に対する前向きな回答が見られた。

オンライン交流実施後のアンケートでは、「対面型とオンライン型の両方に良さがある」という回答が大多数を占める結果となった。対面での交流だからこそできることと、オンライン交流だからこそできることの理解が生徒の中で深まっているようだ。また、それぞれの場面や方法に応じて、相手に伝わりやすいコミュニケーション方法を想像し、工夫する力が高まったようである。

（文責：澤口真弓、田中豊大、田万幸子、久川浩太郎）

４．高等部専攻科の交流

（１）パリ聾学校との交流　―校外・お台場にて―

専攻科ではパリ聾学校来日の際、校外にて交流活動を行った。交流に先立ち、場所は先方希望のお台場であること、内容は本校参加者が企画することの２点を伝え、生徒から交流参加者を募った。４名の参加が決まり企画会議が開始されたが、教員側からは活動時間と過去の交流データの提供のみとし、生徒たちに多くを任せることにした。様々な案を検討した結果、パリ聾学校の生徒をもてなしながら自分たちも一緒に楽しむことが大切と気づいた生徒たちにより、トリックアート美術館、テレビ局、昼食は多様な主義に対応できるフードコートという計画が立てられた（図１）。

図１

【交流の流れ】

新橋集合→お台場へ移動

→トリックアート美術館→昼食

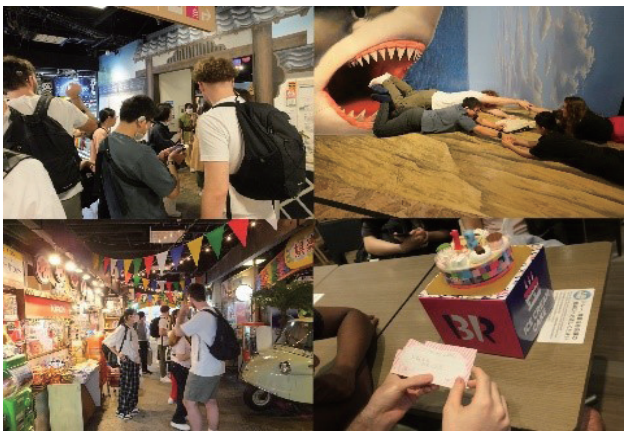
→テレビ局見学→新橋へ移動→解散

交流当日、緊張ぎみだった生徒たちも移動の頃には、スマートフォンを駆使した積極的なコミュニケーションが見られるようになった。美術館では万国共通のユーモアに盛り上がり、パリ聾学校の

面々とその世界を謳歌。フードコートではパリ聾学校の生徒のメニュー選びを手伝いながら交流。昼食後のおしゃべりタイムには、来日中に誕生日を迎えるパリの生徒をサプライズでお祝い（図２）。この盛り上がりの中、校外活動に不参加の生徒を含む専攻科生全員からのパリ聾学校の生徒に向けたメッセージブックを披露。これは「私たちからの日本のおススメ」を日本語英語併記で紹介したものである（図３）。裏には絵の得意な生徒による日本の四季のイラストもあり、パリの生徒は興味津々であった。

この交流は、校外での活動参加者をはじめ、メッセージで参加した生徒にとっても印象深い交流となったようだ。今後も『様々な交流の形』を模索して生徒の他文化への興味と理解を深めていきたい。

図２



上左右・下左：トリックアート美術館にて
下右：サプライズで誕生祝い

図３

上：メッセージブックを披露
下：メッセージブック（部分）

（２）造形芸術科における台湾の聾学校との美術作品交流

造形芸術科では台湾の聾学校２校（臺北市立啓聰學校、臺南大学附属啓聰學校）と 2017 年より美術作品交流をネットワークによるデータ交換の形で行ってきた。実作品による交流には多くのハードルがあるが、この形をとることで幅広い作品をお互いに届け合うことが可能となり、コロナ禍でも継続することができた。

今年度は造形芸術科の作品に加えて高等部の作品や小学部の作品など、例年より幅広い年齢層を交流の対象として、これまでより幅広い表現を届けるよう意識した。作品ジャンルについても、これまでの平面作品を中心としたものに立体作品を加えた。台北からはレリーフ、デザイン、絵画など、台南からはデザイン、絵画、書などが届き、それらは全て第５回日台聾学校美術交流展（市川市芳澤ガーデンギャラリー・１月 19 日～21 日開催）に於いて本校関係者のみならず地域の方々にもご覧いただき、文化による表現の相似、相違を味わっていただくことができた。会期中に実施した本校生徒の見学会では、自分と違う視点による表現を鑑賞することで新たな発想へとつながったようである。

コロナ禍でもネットワークを介して届け合ってきた美術作品だが、海外との直接交流が可能となった今、それぞれの長所を活かして２つの方法を併用した幅広い交流へと広げて行きたい。そして新しい試みを加えながら日台聾学校による美術交流を、今後とも発展させたい。　（文責　玉生美智子）

附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み

１．本校の国際教育の特徴

本校の国際教育の目的は、幼児児童生徒が自国や他国の文化に興味をもち大切にしようとするとともに、共に学び合うこと、教師が自国や他国の文化を尊重しながら互いの教育力を高めることである。

今年度は知的障害教育における外国語教育の推進として外国語教育についての授業研究を進め、指導計画のモデルを蓄積していくことに加え、JICA（独立行政法人国際協力機構）等の関連機関との交流や、Tokyo Global Gateway での学習を通して、知的障害のある幼児児童生徒が、外国語でのコミュニケーションを楽しむための指導上の配慮等の検討を進めてきた。

２．独立行政法人国際協力機構（JICA）の研修生との交流

今年度５月に、COVID 19 が第５類感染症に移行したこともあり、本校に視察や見学のため来校する海外の機関や特別支援学校が増えてきた。廊下から幼児児童生徒の授業の様子を見学されることが多かったが、子供たちの中には普段接することのない外国人に興味を持って、挨拶をしに行こうとする様子があった。

本校にて、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）における研修が数回あり、10 月にはウズベキスタン共和国から 12 名、12 月にはアジアやアフリカから 12 名の研修生が来校した。それぞれ小学部と幼稚部において交流の機会があった。

(1) 幼稚部の交流

今年度の 12 月にアジア・アフリカから研修員の方々が来校された。障害のある子どもの教育の視察を目的とし幼稚部を中心とした参観が行われ、エジプトの特別支援学校の教員数名と幼稚部の子供たち４名が、一緒に運動遊びのサーキットなどの活動を通して交流を行った。初めて会った外国人の方から「グッジョブ！」と褒めてもらい、子供たちは嬉しそうな様子だった。その後、プレイルームでも自由遊びを一緒に楽しんだ。本校の幼児は４名とも発語がないが、「Hello!」と目を合わせてハイタッチをしてくれる外国人の教員の方々に、笑顔でタッチを返したり、「もっと遊ぼうよ！」とサインで要求したりする姿が見られ、言葉の壁を越えた交流の機会となった。

(2) 小学部の交流

本校は、JICA と筑波大学、国士舘大学の共同による「ウズベキスタン共和国就学前インクルーシブ教育実践強化プロジェクト」より依頼を受け、ウズベキスタン共和国の教員や教育行政担当者など 12 名の研修者の受け入れを行った。就学前インクルーシブ教育実践の強化を目的としていることから、本校小学部で研修の受け入れに対応している。その際、研修者より、実際の授業の中で幼児・児童と交流したいという希望を受けたことから、国際教育の事業に位置付け、交流授業に取り組んだ。ここではその取り組みについて報告する。

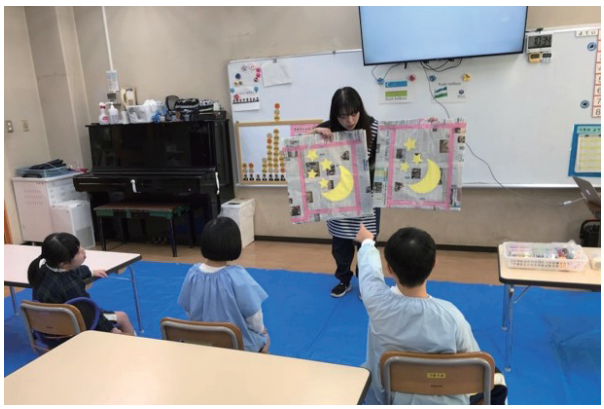
小学部では、自国や他国の文化に興味をもち、大切にしようとするとともに共に学び合うこと、教師が自国や他国の文化を尊重しながら互いの教育力を高めることという国際教育のねらいに基づいて、３・４年生(つき組)の図画工作の授業にウズベキスタン共和国の研修者が入り、授業の様子を観察したり、通訳を介して児童や教員と会話をしたり、全員で記念の集合写真を撮影するなどの活動を共同して行った。

①　事前の指導

３・４年生学級では、JICA を通じて提供されたウズベキスタンの国旗、民族帽子などを紹介しながら、ウズベキスタンより先生が来校し、交流することについて事前の学習を行っている。また、歓迎の意を示すために、国旗を持ったり、民族帽子を被った児童の写真を撮影し、それを教室前に掲示したり、挨拶の言葉を玄関前に掲示したりするなどの取り組みを行った。このことを通して、国家を象徴する国旗に触れてウズベキスタンの文化の一端に触れることができた。また、民族帽子の形や模様を観察することを通して、自国である日本と他国としてのウズベキスタンの帽子との違いを感じることができたと考える。

②　交流授業の実際

図画工作の授業の題材は「おおつかさいの T シャツをつくろう」というもので、11 月に行われる大塚祭で使用する衣装の T シャツに、絵の具とスポンジ、型抜きを使用して動物の絵柄をスタンプして描画する活動として計画されたものである。



メインティーチャーの指示の下、小グループに分かれて学習に取り組んでいる様子をウズベキスタンの研修者が周囲より観察した。学部主事が学習の内容と目標、指導上の留意点について通訳を介して伝え、研修員より個別に質問を受けながら、授業観察を行った。特に、使用している絵の具の材質や、スタンプに使用しているスポンジの材質、児童への取り組ませ方の工夫についての質問があり、学部主事や担任教諭を交えて情報交換を行った。

また、ウズベキスタンの研修者から児童に話しかけたり、児童から作品を見せたり、ハイタッチをするなどの緩やかな交流が行われた。

③　事後の取り組みと成果について

事後、プロジェクトの担当者より、研修を受けたウズベキスタンの教員が、見学した図画工作の授業を参考にしながら、帰国後に同国の幼児に対しスタンプを使用した描画に取り組んだことについて報告を受け、その際の画像の提供を受けることができた。型抜きの素材として、３・４年学級で取り組んだ型と同じ新聞紙を活用し､破けないように周囲をテープで補強したものを使用していた｡また、３・４年学級ではスタンプの材料としてメラミンスポンジを使用したが、食器洗いスポンジで代用するなど研修したこと活かして実践していた。教育の考え方や方法にも文化の違いがあるだろうが、同じように教材を作成し、それを使って授業に取り組んだことがよく伝わってくるものであった。

３．Tokyo Global Gateway での体験（事前学習）

今年度の３月に、中学部１年生の生徒が東京都にある体験型英語学習施設「Tokyo Global Gateway (以下、TGG)」を利用することを計画している。TGG は、外国人スタッフとの買い物や食事の注文などのやりとりを通して、外国に訪れたような体験をすることができる施設である。学校行事の関係で施設を利用するのは３月だが、校外学習に向けて単元を設定し、事前学習を進めている。

事前学習では、はじめに世界には色々な国があることや、国によって話す言葉が違うことについて学習し、色々な言葉でのあいさつを体験した。また、生徒たちの興味関心の高い「食べ物」を題材として、外国の食べ物について調べ、世界地図に写真を貼る活動を行った。今後、調べたものから生徒が食べてみたいものを選び、実食する予定である。

TGG では、外国人スタッフの掛け声に合わせて身体を動かすダンスプログラムと、海外旅行をしている時のように、飛行機の中やギフトショップ、レストランで英語のやりとりを体験することができるプログラムがある。事前学習の中では、同様に教員の英語での掛け声に合わせて身体を動かす活動を通して、左右や身体の部位の名称、walk, step, jump などの動きを表す言葉について触れたり、教員を相手に英語で依頼をしたり、要求を伝える練習をしたりした。

普段の授業では英語でのコミュニケーションに自信を持っている生徒でも、外国人と話すことを伝えると「なんて言えばいのかわからない！」「どうしよう！」と緊張している様子であったが、事前に練習を繰り返すことで自信が持てるようになり、TGG に行くことを楽しみにする姿が見られている。

４．本校の外国語（英語）学習

今年度は、知的障害教育における外国語教育の推進として外国語教育についての授業研究を進め、指導計画のモデルを蓄積していくことを目的とし、中学部と高等部での外国語（英語）の授業の検討を進めた。中学部・高等部の生徒は、JICA の研修生と交流の時間を設けることができなかったが、廊下ですれ違ったり、教室に授業の見学に来られた際に会ったりすることがあった。その際に“Hello!”と積極的にあいさつをすることができた生徒がいる一方で、「○○って質問したいけど、なんて言えばいいの？」と話しかけてみたくても、何と言えば良いかわからない生徒もいた。生徒が自信を持って交流することができるように、国際教育の一環として英語学習をしていく必要があると考える。

(1) 中学部

中学部では、３学年合同で１週間に１時間、外国語（英語）の授業を実施した。今年度は年間を通して「自分の気持ちや意見を伝える」ことをねらいとした単元を計画した。１学期は、外国語の授業に初めて参加する１年生もいるため、音楽に合わせて身体を動かしながら英語に触れる活動を取り入れ、生徒たちが楽しみながら学習できるようにした。また、気持ちや身体の状態を伝える言葉を学習

し、“How are you?” の質問に対して自分の状態に合わせて答える活動を実施した。このやりとりは通年続けたことで、ほぼ全員の生徒がその時の状態に合わせて “Good.” “Tired.” など言葉を選んで答えることができるようになった。２学期は一般動詞の「have」「like」「want」の３つを取り扱い、自分の持ち物、好きなもの、欲しいものを伝える活動を行った。ハロウィンやクリスマスなど、季節の行事と関連させることで、楽しみながら伝えることができていた。３学期は、前単元で学習した動詞を使い、友達同士で質問したり、答えたりする活動を実施した。“How are you?” のやりとりも、友達同士で行うようになった。どの生徒も友達と英語で話すことを楽しみ積極的に話そうとする姿が見られた。来年度以降も、生徒たちが英語を楽しく学習できるようなカリキュラムや、主体的に学習に参加できるような支援方法・教材を考えていきたい。

(2) 高等部

高等部では、学年ごとに、１週間に１時間の外国語（英語）の授業を実施した。昨年度はオンラインで各学年をつないで授業をしていたが、今年度はクラスごとでの授業となり、より仲間とのやり取りやコミュニケーションを深める授業を行うことが可能になった。年度初めには、「英語が楽しみです。」という声もあれば、「私は英語が苦手です。」と言う生徒もおり、外国語の授業に関するイメージはそれぞれだった。

１学期は、好きな物や出身地を伝え合ったり、ビンゴやカルタなどのゲーム活動を通して食べ物や身近な物の名前を楽しく学習したりした。歌や生活に身近な内容を取り入れて、英語に親しめるような授業を意識した。

２学期は、修学旅行と関連させて、目的地長崎の道案内をする活動を行った。地図を見て人形を操作しながら、目的地までの道順を英語で発表することができた。また、Writing の活動も取り入れ、アルファベットには大文字と小文字があることや、筆順も確認し、同時に ALT と教材作成したフォニックスも取り上げ、アルファベットを意識できるような授業を意識した。３学期は、レストランでのメニュー注文の場面を取り上げ、やり取りを中心とする授業を展開した。

また、長期休暇後には休み中の思い出を発表する活動を実施した。 “I enjoyed ～. ” と、簡単な英文で、自分の思い出を伝えたり、仲間の発表を聞いてワークシートのイラストに丸をつけたりした。冬休み後にも同じ活動を行うと、“I enjoyed ～, ～ , ～ , and ～ . ” と、言葉を複数繋げて伝えようとする姿が見られた。友達の発表を聞いている生徒も、イラストに○を付けるだけでなく、英単語を書いてみようとする生徒もいた。うまく伝えるためにジェスチャーを付けてみたり、聞き取れなかったときに “One more please?” と自主的に伝えたり、５つや６つの単語も意欲的に聞き取ろうとしたりと、２学期よりも３学期に確実に成長が感じられた。自分の経験したことだったからこそ、知的障害のある生徒たちも、自分事として英語で伝えようという意欲が高まったのだと思う。今後も、英語で伝わった喜びを積み重ね、伝え合う力を身に付けてほしい。

（文責：2 (1)　岩附成子、(2)　田上幸太、4(2)　長谷川浩子、他　宮林一菜）

コロナ禍を経て直接交流復活の兆し

１．本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では，国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と，積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ，国際教育の実践を行っている。

本校の国際教育活動としては，韓国・広州セロム学校や台湾・国立南投特殊教育学校及び国立和美実験学校の３校と交流事業を行っていたが、昨年度に協定が終了したため，今年度は新たな協定校を探しつつ、校内で行える国際交流行事の充実を図った１年であった。

２．活動報告

（１）高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

令和６年１月２３日５・６校時に高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。今年はコロナ禍を経て４年ぶりの対面実施となり、事前打ち合わせにはオンライン会議システム Zoom を利用し、当日は対面で実施した。

生徒には以下の目標を提示した。「交流相手の立場や文化的背景をふまえ、グループの仲間と共に、何をすべきか（何が求められているか）を設定し、情報収集や表現の方法を検討し、計画を立てることができる。」「自分の興味関心ごとを切り口に、これまで知らなかった世界各地の文化や情勢等について知り、社会参画していく自己について考えることができる。」「（以上の２つの目標をふまえて）＋個人目標１つ（チャレンジしたいこと）」

初回の９月２６日には、高等部２，３年生を対象にガイダンスを行い、アンケートを実施した。（写真１）アンケートの内容は「留学生に、日本について桐が丘について、どのようなことを知ってもらいたいか」「あなたが発信したい（できる）のは日本のどのような〇〇？」についてであった。その結果テーマを「食文化」「音楽」「ことばと慣習」「映像作品」の４つに絞り、当日どう交流するのかについて高等部２，３年生が話し合った。交流方法は、生徒と留学生を４つのグループに分け，それぞれのグループにテーマを１つずつ割り当てて留学生と生徒が事前準備を進め、交流当日に発表し合うことに決まった。１２月５日にオンラインで留学生と顔合わせをし、グループごとの打ち合わせをした。この際、留学生には各グループのテーマに沿った出身国の国紹介をしてほしいことを依頼した。

（写真１）

（写真２）

交流当日はまず、お互いに自己紹介をした。（写真２）生徒らはぎこちない様子ではあったが、一生懸命英語とジェスチャーを使って会話を続けようとしていた。
その後、グループごとに学校見学ツアーを行い、各教室を巡りながらどのように授業を受けているのかを説明した。自立活動で使うプレイルームでは、肢体不自由のある児童生徒が体の調整を行うためにクッションやマットレスなどを使うことを説明すると、留学生は授業でそのような時間が設けられていることに驚いている様子であった。（写真３）
テーマ別のグループ活動では、各グループとも思考を凝らした表現方法でテーマに沿った国紹介をした。中でも「ことばと慣習」がテーマのグループは、生徒が書道を披露しながら説明を行い、留学生にも実際に書道で好きな言葉を書いてもらいながら交流していた。（写真４－６）
いずれのグループもよく準備し、交流当日は和やかな雰囲気で活動していた。対面の交流はここ数年の Zoom での交流とは違い、やはり刺激が大きい。生徒の感想にもあるように、今回の交流でもっと英語の勉強を頑張ろうと感じた生徒が、一人でも増えてくれることを願う。

（写真３）

（写真４）

（写真５）

（写真６）

（２）JICA 研修員による小学部４年生国語の授業見学

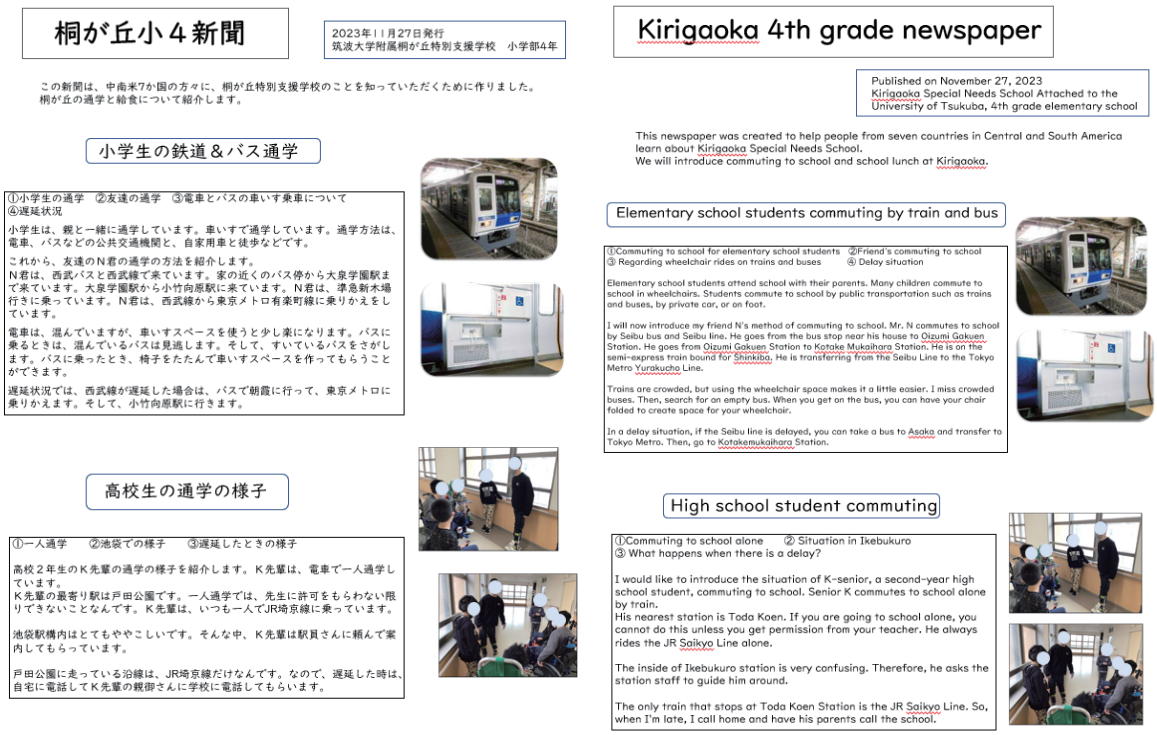
令和５年１１月２８日、中南米７か国（ドミニカ共和国、ベリーズ、コロンビア、ウルグアイ、パラグアイ共和国、ペルー、グアテマラ）の JICA 研修員の方々が、小学部４年生の国語の授業を見学された。
国語の授業ではまず、自己紹介を英語やスペイン語で伝えた。また、通常の国語の授業の様子として漢字学習の様子と、休みの日の話の発表を披露した。漢字学習は、読み方や書き順、どの言葉に使わ

れているかを事前に調べ発表した。休みの日の話では、最初は児童同士でやり取りをしていたが、途中から JICA 研修員の方へも質問を投げかける場面があった。寿司屋に行った話をした児童は、JICA 研修員の方に「お寿司は何が好きですか」「ペルーにはスシローがありますか」などたくさんの質問を投げかけ、児童自ら外国の方との交流を楽しんでいる様子であった。最後にお土産として、桐が丘特別支援学校のことを知ってもらうために作成した「桐が丘小４新聞」を JICA 研修員の方にお渡しした。（写真７，９）

児童はこの日のために中南米７か国について国の特徴を調べてウェルカムボードに調べたものを掲示し、現地の人との交流を待ち望んで当日を迎えた。（写真８）この交流をきっかけに、児童にとっては中南米の国々にも意識するように変化した様子であった。

（写真７）

（写真８）



桐が丘小４新聞

2023年11月27日発行
筑波大学附属桐が丘特別支援学校　小学部4年

この新聞は、中南米7か国の方々に、桐が丘特別支援学校のことを知っていただくために作りました。
桐が丘の通学と給食について紹介します。

小学生の鉄道＆バス通学

①小学生の通学　②友達の通学　③電車とバスの車いす乗車について
④遅延状況

小学生は、親と一緒に通学しています。車いすで通学しています。通学方法は、電車、バスなどの公共交通機関と、自家用車と徒歩などです。

これから、友達のＮ君の通学の方法を紹介します。
Ｎ君は、西武バスと西武線で来ています。家の近くのバス停から大泉学園駅まで来ています。大泉学園駅から小竹向原駅に来ています。Ｎ君は、準急新木場行きに乗っています。Ｎ君は、西武線から東京メトロ有楽町線に乗りかえをしています。

電車は、混んでいますが、車いすスペースを使うと少し楽になります。バスに乗るときは、混んでいるバスは見逃します。そして、すいているバスをさがします。バスに乗ったとき、椅子をたたんで車いすスペースを作ってもらうことができます。

遅延状況では、西武線が遅延した場合は、バスで朝霞に行って、東京メトロに乗りかえます。そして、小竹向原駅に行きます。

高校生の通学の様子

①一人通学　②池袋での様子　③遅延したときの様子

高校２年生のＫ先輩の通学の様子を紹介します。Ｋ先輩は、電車で一人通学しています。
Ｋ先輩の最寄り駅は戸田公園です。一人通学では、先生に許可をもらわない限りできないことなんです。Ｋ先輩は、いつも一人でJR埼京線に乗っています。

池袋駅構内はとてもややこしいです。そんな中、Ｋ先輩は駅員さんに頼んで案内してもらっています。

戸田公園に走っている沿線は、JR埼京線だけなんです。なので、遅延した時は、自宅に電話してＫ先輩の親御さんに学校に電話してもらいます。

Kirigaoka 4th grade newspaper

Published on November 27, 2023
Kirigaoka Special Needs School Attached to the University of Tsukuba, 4th grade elementary school

This newspaper was created to help people from seven countries in Central and South America learn about Kirigaoka Special Needs School.
We will introduce commuting to school and school lunch at Kirigaoka.

Elementary school students commuting by train and bus

①Commuting to school for elementary school students　②Friend's commuting to school
③ Regarding wheelchair rides on trains and buses　④ Delay situation

Elementary school students attend school with their parents. Many children commute to school in wheelchairs. Students commute to school by public transportation such as trains and buses, by private car, or on foot.

I will now introduce my friend N's method of commuting to school. Mr. N commutes to school by Seibu bus and Seibu line. He goes from the bus stop near his house to Oizumi Gakuen Station. He goes from Oizumi Gakuen Station to Kotake Mukaihara Station. He is on the semi-express train bound for Shinkiba. He is transferring from the Seibu Line to the Tokyo Metro Yurakucho Line.

Trains are crowded, but using the wheelchair space makes it a little easier. I miss crowded buses. Then, search for an empty bus. When you get on the bus, you can have your chair folded to create space for your wheelchair.

In a delay situation, if the Seibu line is delayed, you can take a bus to Asaka and transfer to Tokyo Metro. Then, go to Kotakemukaihara Station.

High school student commuting

①Commuting to school alone　② Situation in Ikebukuro
③ What happens when there is a delay?

I would like to introduce the situation of K-senior, a second-year high school student, commuting to school. Senior K commutes to school alone by train.
His nearest station is Toda Koen. If you are going to school alone, you cannot do this unless you get permission from your teacher. He always rides the JR Saikyo Line alone.

The inside of Ikebukuro station is very confusing. Therefore, he asks the station staff to guide him around.

The only train that stops at Toda Koen Station is the JR Saikyo Line. So, when I'm late, I call home and have his parents call the school.

（写真９）

（３）給食を通しての異文化体験

今年度も給食で世界の料理が提供された。当校では世界を身近に感じられるようにと、毎年献立に海外の料理が取り入れられている。当校は車いすの児童生徒が大半を占めているが、修学旅行で海外へ行く機会はもちろん､家庭で海外へ行く機会も多くはない現状がある｡そのような状況であっても、学校全体で一斉に異文化体験できる機会は貴重である。

今年度は当校職員が在外派遣で滞在しているオランダとインド、当校職員が青年海外協力隊として勤務していたモザンビーク、そして身近な韓国の料理を味わった。(写真１０‐１３）児童生徒は海外の料理が提供される日は、給食の献立に書いてある聞きなれない料理名と食材をヒントに、どんな料理が提供されるか想像しながら楽しみにしている様子であった。そして実際に料理を目の当たりにして、「思ってたのと違った」「日本の○○と味が似ている」など、様々な感想を言い合いながら、食べ慣れない味を楽しんでいた。

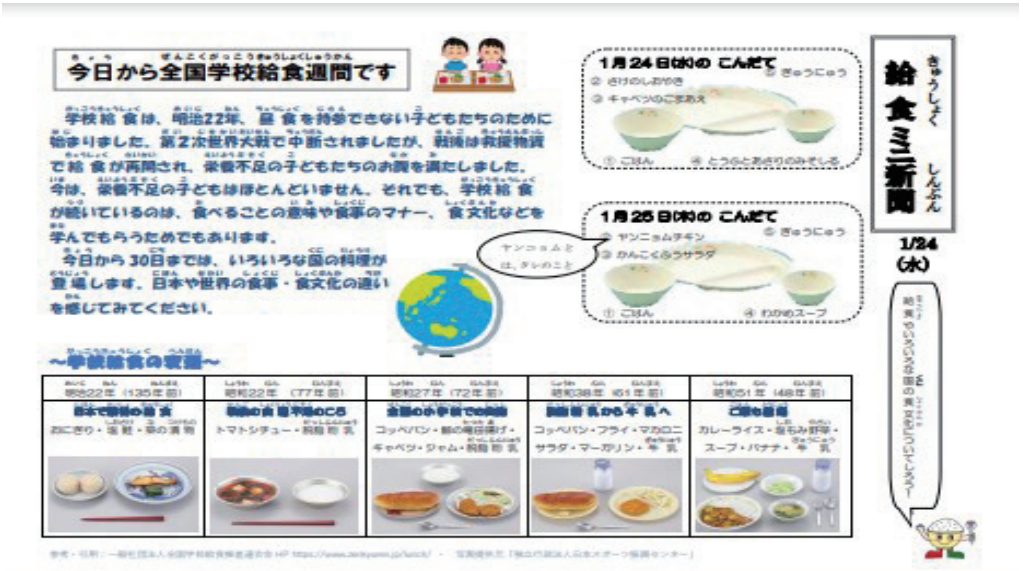
給食の時間だけでなく、オランダの料理が出される日の中学部２年生の英語の授業では、生徒の間でオランダに関する物について、話題が上がっていた。「チューリップとか風車以外にも、『アンネの日記〉』のアンネフランクとか、フェルメールの『真珠の耳飾りの女』とかもオランダと関係があったんだ。」など、意外と身近なオランダに認識を新たにしていた。

（写真１０）

（写真１１）

今日はインド料理！
今日は、桐が丘の先生でもあり、
現在、インドの日本人学校で先生をしておられる
鈴木泉先生 に、インドの食生活について伺いました！
鈴木 泉 先生
調査、在外教育施設
派遣教師として、
北インド在住
こんにちは！インドで人気の料理を教えてください！
インドのスナックを紹介します。北インドでは、小麦の皮の中にスパイスで味を付けたじゃがいもや野菜・ソースを詰めたサモサやパニプリがよく食べられています。
インドの食生活で、驚いたことはありますか？
インドでは、宗教によって食べてはいけないものが決まっています。インドの人たちは自分の食生活を強要したり相手を批判したりせず、尊重して暮らしています。そのため、どのメニューにもベジタリアン用かそうでないか、材料も細かく記載されていることに驚きました。
インドで生活してみて、日本の食生活をどのように思いますか？
インドの人の多くは豆と乳製品でタンパク質をとるので、スーパーでは魚や肉は売っていません。インドに比べ、日本は魚や肉などをよくとっているんだなと思いました。
桐が丘の皆さんへ何かメッセージをお願いします！
インドにはなんと、カレーという言葉がありません。ですが、ほぼ全ての料理にスパイスやハーブなどのマサラが使われているので、カレー味の料理が出てきます。日本でも、いろいろなインド料理が食べられるところがありますので、機会があれば試してみてください。
1月26日 の 献立
②バターチキンカレー ④のむヨーグルト
①ナン ③サモサ
① ナン ・・・タンドールという土の釜の壁に、生地をのばし貼り付けて焼く。インドの家庭にもタンドールはないので、主に外食で食べる。
③ サモサ ・・・インドのスナック（軽食）。香辛料のクミンが入った具を包み、揚げる。
給食ミニ新聞
1/26(金)
インド共和国 の食事 は？
主食：北インドは 小麦 ・・・ ナン、チャパティ、パトゥラ など
南インドは 豆・米 ・・・ ドーサ、イドウリ（米と豆の蒸しパン） など
特徴：・暑さが厳しく、香辛料を多く使う。
・乳製品も多い。チャイというミルクティーや、ラッシーというヨーグルトドリンクは定番の飲み物。
タンドリーチキンの下味など料理にも使用する。
・食事は、右手で食べる。
↑ 北インドのパトゥラ 朝食に豆のカレーと
↑ 北インドのドーサ クレープのように焼く
↑ 南インドのランチ 定食"ミールス"

（写真１２）


今日から全国学校給食週間です
学校給食は、明治22年、昼食を持参できない子どもたちのために始まりました。第2次世界大戦で中断されましたが、戦後は救援物資で給食が再開され、栄養不足の子どもたちのお腹を満たしました。
今は、栄養不足の子どもはほとんどいません。それでも、学校給食が続いているのは、食べることの意味や食事のマナー、食文化などを学んでもらうためでもあります。
今日から30日までは、いろいろな国の料理が登場します。日本や世界の食事・食文化の違いを感じてみてください。
1月24日(水)の こんだて
① ごはん ② さけのしおやき ③ キャベツのごまあえ ④ とうふとあさりのみそしる ⑤ ぎゅうにゅう
1月25日(木)の こんだて
① ごはん ② ヤンニョムチキン ③ かんこくふうサラダ ④ わかめスープ ⑤ ぎゅうにゅう
ヤンニョムとは、タレのこと
給食ミニ新聞
1/24(水)
～学校給食の変遷～
明治22年（135年前）
昭和22年（77年前）
昭和27年（72年前）
昭和38年（61年前）
昭和51年（48年前）
日本で野菜の給食
おにぎり・塩鮭・菜の漬物
戦後の食事不足のころ
トマトシチュー・脱脂粉乳
全国のみ学校での実施
コッペパン・鮮の竜田揚げ・キャベツ・ジャム・脱脂粉乳
脱脂粉乳から牛乳へ
コッペパン・フライ・マカロニサラダ・マーガリン・牛乳
ごはん給食
カレーライス・塩もみ野菜・スープ・バナナ・牛乳

韓国
主食：米
特徴：
・辛いものや発酵食品を多く食べる
理由→ 冬の寒さが厳しい韓国では、体を温める作用のある唐辛子などの辛いものや、さまざまな保存食・発酵食品が発展した。
ユネスコ無形文化遺産："キムジャン"
食事マナー：
・ご飯・汁物はスプーン、おかずは箸で食べる。
・箸は、縦に並べて右側に置く。
・食器は持ち上げない。
・おかずは少し残し、十分に足りたという意味を表す。
・種類は音をたてすすらない。
日本
主食：米
特徴：
・だしのうま味を大切に、旬の素材の味を生かして食べる
理由→ 古くから野菜や魚介類を中心とした一汁三菜（ご飯に汁物と3つのおかず）が基本だったため、淡泊な味わいの素材を生かすだし文化が発展した。
ユネスコ無形文化遺産："和食"
・マナー：
・ご飯・汁物・おかずも箸で食べる。
・箸は、横に並べて正面に置く。
・食器は持ち上げる。
・おかずは残さず食べきるのが、感謝の意味を表す。
・種類は音をたてすすって良い。

（写真１３）

附属久里浜特別支援学校の国際交流

１．本校の国際教育の特徴

本校は、例年、海外から多数の視察を受け入れ、授業の様子を実際に見てもらい、時には子供たちと一緒に遊びや活動を通して触れ合う機会としながら、国際交流を行ってきた。しかし、新型コロナウィルス感染症が世界的に蔓延し、海外からの視察や見学が中止され、教師・幼児児童ともに来校者と関わりをもつことができない状況が続いてきた。今年度は、海外からの視察等を積極的に受け入れ、幼児児童が海外や海外の方に親しむ機会を確保しながら、本校の海外研修視察プログラムの充実を図りたい。また、海外からの来校者との交流に加えて、オンラインを活用した交流の方法について検討している。実践紹介や意見交換などの姉妹校における教師間の交流は継続しながら、新たに幼児児童同士の交流を充実させたいと考える。

２．活動報告

（１）受け入れ型研修

①モンゴル教育科学省就学前教育局視察

令和５年 11 月 16 日、モンゴルから、幼稚園園長や幼児教育行政担当者など教育科学省就学前教育局から８名が来校し、主に幼稚部を参観した。多くの教材が幼児の興味・関心や発達段階に応じて教師が手作りしたものであることを説明すると、大変驚かれ、感心されていた。また、幼児が自分の気持ちを伝えるための写真カード等の使い方や、教師が具体物や写真カードを見せながら次の活動の知らせるやり取りの方法に興味をもち、説明に大きく頷きながら熱心にメモを取っていた。実際に幼児と一緒におもちゃで遊んだり、ハイタッチをして別れの挨拶をしたりして触れ合い、関わる様子も見られた。（写真１、２）

写真１、２　幼稚部を見学する様子

②JICA 研修

令和５年 11 月 24 日、JICA（独立行政法人国際協力機構）における研修の一環で、コロンビアやドミニカ共和国、ウルグアイなど南米を中心とした７カ国から研修員７名が来校した。研修員は各国の教育省等に所属し、特別支援教育に携わる方である。主な研修内容は、本校の概要説明や学校見学、授業参観などであった。

午前中の学校見学では、校内施設や各学級の教室環境を中心に見学した。自然豊かな環境の中、屋外プールや遊具のある広場、体育館などの施設に関する説明を受けながら、熱心にメモを取られていた。また校内の季節や行事に関連した掲示物に興味を示されたり、幼児児童が活用している教材・教具の指導法について熱心に質問されたりしていた。（写真３、４）

写真３、４　教室環境を見学する様子

その後、授業参観を行った。幼稚部りす組（４歳児）では、運動遊び「ひっぱれ！おいも」において、さつま芋のツルに見立てた綱を引っ張る活動を行った。「うんとこしょ、どっこいしょ。」という掛け声に合わせて、幼児が楽しみながら活動に向う様子を、ほほ笑みながら参観された。（写真５）

小学部３年生の体育「ティーボールをしよう」では、分かりやすくルールを伝えるためにスクリーンに投影されたスライドや、自分がやることを理解して意欲的に取り組むための環境設定を熱心に参観されていた。児童がバットを振ってボールを打つ際は、一緒に応援し、児童も笑顔で応じる様子が見られた。（写真６）

写真５　幼稚部の授業参観の様子

写真６　小学部の授業参観の様子

午後は本校の学校概要や各学部概要の説明と質疑応答を行った。概要説明ではスライドや映像を見ながら、熱心にメモを取られていた。質疑応答では、コミュニケーションや排せつに関する具体的な指導方法や、本校が実施する家庭生活を支援する取組などについて、多数の質問が上がった。その他、保護者の障害受容や障害のある幼児児童への福祉サービス、特別支援学校卒業後の進路などについて、活発な意見交換を行った。我々も様々な国の人々と情報交換をすることを通して、日本と海外の福祉や教育制度の違いや、障害のある人々を取り巻く状況について知ることができた。また、障害のある子供たちを支援するために、熱意をもって活躍されている人々と関わることができ、我々にとっても非常に貴重な機会となった。（写真７、８）。

写真７　学校概要説明の様子

写真８　記念撮影の様子

感染症対策のため、以前のように海外から来校された方々が、幼児児童と一緒に給食を食べたり活動に参加したりして交流を深めることは難しかったが、幼児児童がいきいきと活動する様子を実際に見たり、簡単な挨拶の言葉を交わしたりして交流することができた。

（２）中国達敏学校との交流

中国浙江省寧波市に所在する達敏学校は、2010 年全中国特別支援教育の中で優秀教育学校に選ばれ、2011 年には全中国の特別支援学校の研究指定校として、研究発表会を開催した。特別支援教育に関して、中国を代表する学校の一つである。2013 年には、中国で初めて自閉症児を対象とする幼稚部を新設する等、先進的な取組を実施している。

達敏学校と本校は、2011 年から 2021 年まで国際交流協定を締結し、教員が相互に訪問して交流を重ねてきた。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、オンラインを活用して交流を再開し、姉妹校協定を再締結することとした。

①教員間の交流

中国のリモートワークアプリケーション「Ding Talk」を使用し、オンラインでの交流を進めている。達敏学校における国際交流の窓口兼通訳である劉暢教諭と、双方の学校の現状や課題に関する情報交換を行い、今後の交流の方向性について検討を重ねた。授業研究会の実施等、教員間での活発な交流方法を模索中である。

②姉妹校協定締結式

令和５年７月３日、オンラインで姉妹校協定締結式を実施した。双方の管理職等の職員の自己紹介や、事前に翻訳した学校紹介動画の視聴を行い、相手国の自閉症教育の実際や学校の教育内容などについて知見を深めることができた。達敏学校陸雪萍校長と本校伊藤校長が協定書に署名し、姉妹校協定の締結を行った（写真９、10）。

写真９　学校紹介動画視聴の様子

写真 10　締結式の様子

③アジア大会開催に向けた幼児児童の交流

本校は知的障害を伴う自閉症児を対象とした幼稚部・小学部を設置した学校であり、幼児児童の実態を踏まえると、オンラインで子供同士の活発な交流を行うことは難しい面があった。これまで、対面とオンライン共に、幼児児童間の交流を実施したことはなく、今回が初めての実施であった。交流では、中国杭州で開催される第 19 回アジア競技大会に向けて、双方の国の文化や様々な競技への興味・関心を高めたり、一緒に活動することを通して幼児児童同士の交流を図ったりすることを目的とした。達敏学校の担当教諭と、活動内容や手立てについてやり取りを重ね、リハーサルを実施した後、当日を迎えた。主な活動は、双方の参加児童の興味・関心や実態を踏まえ、ジェスチャークイズ、バスケットボールのシュート対決、ダンス披露の３つを行った。

ジェスチャークイズでは、本校小学部の各学年代表児童６人と達敏学校の高学年代表児童５人が参加し、アジア大会の実施競技を表したジェスチャーを見て、競技名を答えた。イラスト等の視覚支援

を活用した教材を使用することで、児童が自信をもって解答したり、言語が異なる双方の児童が内容を理解して活動に参加したりすることができた。（写真 11、12）

写真 11、12　ジェスチャークイズの様子

バスケットボールのシュート対決では、ジェスチャークイズと同じ児童が参加し、シュート数を競った。児童の実態に応じてバスケットゴールの形態や距離を調整することで、達成感を感じながら活動に向うことができた。相手がシュートする際、「がんばれ！」や「ジャーヨー！（中国語で頑張れ）」と言って応援したり、ゴールに入ったボールの数を一緒に数えたりするなど、楽しみながら参加する様子が見られた。（写真 13、14）

写真 13、14　バスケットボールシュート対決の様子

ダンス披露では、本校幼稚部・小学部の幼児児童約 50 人と達敏学校の中・高等部生徒がお互いにダンスを披露した。達敏学校の生徒が色鮮やかな伝統的な衣装や道具を身に付け、音楽に合わせて踊る姿を、本校の児童もよく見ていた。終わりの挨拶では、本校 4 年生の児童が中国語の挨拶を事前に調べ、メモを読み上げながら、楽しかった気持ちを伝えることができた。（写真 15、16）

写真 15、16　ダンス紹介の様子

３．今後の国際交流に向けて

海外からの研修・視察の受け入れを再開し、今回報告したモンゴルや JICA に加え、アイダホ州立大学や SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）の見学を受け入れた。積極的な受け入れを継続し、本校の研修視察プログラムの充実を図るとともに、幼児児童が海外や海外の方々に親しむ機会を設定していきたい。合わせて、姉妹校である中国達敏学校と仁愛学校において、オンラインで授業研究会等を実施することで、自閉症教育の発展に寄与するとともに、本校の教師の専門性を高めていきたい。幼児児童間の交流についても、実態に応じて活動内容や手立てを検討し、よりよい交流方法を模索しながら継続していきたいと考える。

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

体験を通して他者理解、異文化理解の充実を図る

１．活動報告

①　筑波大学留学生との交流会

小学校では、筑波大学に在籍している留学生との交流を継続して行ってきた。本年度は、12 月に、ミャンマー、韓国、ナイジェリア、ガーナ、ボツワナ、アゼルバイジャン、ルワンダ、リベリア、ジンバブエから来日している筑波大学の留学生との交流会を高学年のクラスごとに実施することができた。

この交流は、英語を使ってコミュニケーションを図ることができる貴重な場であるとともに、自己紹介や質問タイムを通して留学生と関わり、他国の様子を実際に聞くことを通して異文化理解を深める機会となっている。事前に準備した英語の質問を聞いたり、グループごとにゲストを紹介するポスターを作製したりするなど、ひとりひとりが留学生と関われる時間をもつことができた。

（児童生徒の感想）

・５年：僕は発音よく質問することを目標にしていたけれど、それがよくできたと思う。色々な国から来ていて、お話ができてよかった。

・５年：初めてアフリカ出身の人と話すことができました。とても緊張したけれど、英語で話せてうれしかったです。

・６年：去年より英語でコミュニケーションがとれたような気がします。いつも緊張するけれど、はなしてみるととてもいいひとでした。また交流会で話してみたいです。

・６年：準備した質問はよくできました。英語のクイズも楽しめました。ただ、言いたいことが英語で言えない時もあって、なかなか大変でした。

②　ALT の先生との個別交流・ハワイ事前研修

ALT の先生とのイングリッシュルーム（Lily’s room）を開設し、中休み、昼休みの時間に１年から６年までの交流したい希望者を募って実施した。本年度は低学年だけでなく、中学年、高学年の利用もあり、英語に触れながら楽しく ALT の先生と活動する様子がみられた。小学校で英語の授業がはじまるのが３年であるが、幅広い学年の児童が積極的にリリー先生と関わりをもち、英語に触れる機会をつくれたことは成果であった。

また、本年度はハワイ研修に参加する児童の事前研修の時間としても利用し、自己紹介や簡単な英語のやりとりを学ぶ時間を設けた。英語で自己表現することにまだ慣れていない児童もいるなかで、３月のハワイ研修を見据えて、英語でのやりとりを学習する場となった。

（児童生徒の感想）

３年：ハロウィンの時に、リリー先生と一緒に折り紙を使って飾り物をつくったのが楽しかった。英語でハロウィンの単語も一緒に教えくれました。

４年：ハワイ研修に向けて、自己紹介を練習しました。最初はうまく言えなかったけど、少しずつ上手になってきました。

５年：授業では ALT の先生と一緒の授業がないので、楽しく会話ができてよかったです。

５年：リリー先生が音楽をかけて歌を教えてくれたり、カードゲームをするのが楽しかったです。

附属中学校　English Room 活動報告

１．活動報告

基本的には例年通り実施

・前期は週１回（水曜日）、後期は週２回（火・水曜日）、昼休みと放課後に開設する。
・開室中は通常授業の Team-teaching の ALT が常駐する。
・利用時間は１枠 15 分交代、利用人数は１枠２名までを原則とする。
・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
・アメリカ短期留学プログラム・国際交流プログラム参加生徒は積極的に活用するように呼びかける。
・来室した生徒を毎週記録しておく。
・１年生の利用は後期からとする。
・アメリカ短期留学プログラムの写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。
・多読用の本を準備し、待ち時間に読めるようにしている。

２．生徒の感想

・うまく話せないことが多いけれど、その「話せなかったな」「こんなこと言いたかったな」という気持ちが出てきて、もっと頑張って勉強しようという気持ちになる。これからもたくさん行って、もっと話せるようになりたい（２年）

・言っていることがわからない時にも、先生は優しく、絵やジェスチャーをつかってわかりやすく説明してくれるので、助かる。そのような経験を積み上げていくうちに、だんだんわかるようになってきて、とても楽しくなってきている。（２年）

・何回も繰り返して来室していると、言いたいことが言えるようになってくる実感があって嬉しい。授業でいざ話す場面になったときも、緊張するけれど、前よりは自信をもって言えるようになったと思う。（１年）

・授業で教わったことが実際に通じたときがとても嬉しい。発表があるときには、その練習もしてくれるので、とても役に立っていると思う。（１年）

附属高等学校のイングリッシュルーム活動について

１．活動報告

① Mac Rae 先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）による英語指導

各国際交流プログラムに参加する生徒に対しての研修を、前期の木曜日・金曜日の放課後に実施した（各曜日 120 分×３回)。また、希望する生徒に対しての個人または少人数指導（英会話・スピーチ・面接・英作文等）を、前期および後期の木曜日・金曜日の放課後と金曜日の昼休みに行った（１コマ 20 分)。

さらに、昨年度に続き、スタンフォード大学が提供するオンライン授業（Stanford e-Japan）への参加希望者に対しての指導も行った。Stanford e-Japan に出願する際には志望動機等の英文エッセイが求められるため、メールを通じて、希望する生徒の英文添削をしていただいた。

② Juppe 先生（本校 ALT）による英語指導

火曜日の放課後に、本校の英字新聞部の活動に参加していただいた。今年度は英字新聞の発行はなかったが、英語による日常会話やディスカッション、ディベートの指導を行っていただいた。

今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的をまとめると、以下のようになる。

・国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（１、２年生）
・大学入試に向けた英語のエッセイの添削、及び英語面接の練習（３年生）
・Stanford e-Japan に申し込む書類の添削（１、２年生）
・「論理・表現Ⅰ」の授業で行うスピーチの原稿の添削とスピーチ練習（１年生）
・英語の運用能力を伸ばすため（１～３年生）

＊利用者数は、2024 年１月現在 58 名

２．生徒の感想

本校には英語のアウトプットスキルを伸ばしたいと考えるモチベーションの高い生徒が多く、「イングリッシュルーム」は欠かせない存在となっている。以下は、生徒によるコメントの一部である。

・ 私の英語の文法がおかしくてもマクレイ先生は理解して正しい英語にしてくださるので、安心して話すことができました。
・ プレゼンテーションで使用するポスターの英語表記について指導していただきました。ネイティブでなければわからない英語の感覚なども教えていただき、フォーマルな英文の作成に役立ちました。
・ 好きな本や授業で行うスピーチのテーマについて話し合いました。スラスラ話せなくても先生が言いたいことを汲み取ってまとめてくださるので、「こう言えばよかったんだ」とわかり、スッキリします。
・ 英語でおしゃべりするだけではなく、プレゼンに対するアドバイスもいただき、感謝しています。

３．今後へ向けて

コロナ禍による制限が緩和された今年度は、４年ぶりに海外渡航を含めた国際交流が行われ、それに向けた研修を実施できたことが大きな成果である。来年度以降はさらに対面による交流が増える見込みであるため、生徒が自信を持って交流に臨めるよう、引き続き充実した研修を提供したい。

また、「イングリッシュルーム」は、経験豊富なネイティブの先生から個人のニーズに合わせた指導を受けられる貴重な機会である。より多くの生徒が英語運用能力を高められるよう、積極的に周知するなどして、活動をさらに活発なものにしていこうと考えている。

English Room 実践報告

１．活動報告

English Room は生徒が自由に参加できる実践的英語コミュニケーション能力育成の機会としてスタートした。講師を主に東京大学の大学院留学生に依頼し、生徒の興味関心に合わせて英会話の練習をして頂いてきた。

近年では、中 3 テーマ学習・高 2 課題研究での講師や生徒の発表指導、台中一中や釜山国際高校に派遣される生徒たちの発表原稿・プレゼン指導などにもご尽力頂いている。English Room 講師は主に大学院留学生（修士課程・博士課程）である為、様々な場面でのプレゼンテーション指導に優れており、生徒達のプレゼンテーションの内容・英語両面のアドバイスから効果的なスライド作成・提示の仕方まで、きめ細やかにアドバイスをして頂いている。上記の総合学習の発表会・リハーサルでは優れた聴衆として生徒達のモチベーションを上げてくれている。

また、ディベートの分野で活躍する卒業生に講師を務めてもらい、語学部のディベートチームへのトレーニングに注力して頂く機会も増えている。その結果、日本高校生パーラメンタリーディベート連盟（HPDU）主催の即興型英語ディベート全国大会において 4 年連続で決勝戦に進出という快挙を成し遂げた。その他、授業でも実施可能な PDA 形式の大会での優勝を含む上位入賞・世界交流大会出場、更には高校生の世界大会（World Schools Debating Championship）の日本代表チームの選手として選抜される等の好成績を収める事例も増えてきている。

コロナ禍以降、特に外国人留学生の新しい講師の確保が難しい状況が続いている為、社会人のビジネスパーソンを含む理系の研究者以外の方に講師を務めていただく機会も増えてきている。特に、今年度は英語プレゼンテーション指導の専門家である Mr. Gary Vierheller と Mrs. Sachiyo Vierheller ご夫妻による講座も English Room の企画として実施した。また、本校の ALT の先生方にも放課後に講師を務めて頂く等、より多くの生徒たちにこのプログラムの利益が還元できるよう、実施可能な形態を模索している。今後も英会話に留まらない高度な英語運用能力の育成を目指した実践を続けたい。

２．児童生徒の感想

- (発表)当日は大勢の見知らぬ人の前で話す緊張感の中でも、Vierheller 先生に習った、ジェスチャーやアイコンタクトなどの技術をある程度織り交ぜながら発表ができたと思う。しかし、Vierheller 先生の講義から本番まで時間がなかったこともあり、まだまだ練習が足りなかった、またこれから様々な発表の場を経験することで、慣れていかないといけないということに気づいた。

（文責：英語科　須田智之、阪田卓洋）

各生徒のニーズに応えるイングリッシュルーム

① 活動報告

1. 東京国際大学との交流

今年も東京国際大学の協力を得て日本に留学中の学生を派遣してもらうことができた。昨年行ったプログラムが好評だったため、今年は規模を拡大して夏季休業中の丸一日をかけたため留学生 10 名、本校生徒のべ 90 名ほどが参加する大盛況となった。留学生たちの出身国はインドネシア、マレーシア、ベトナム、スリランカなど多岐にわたり、ディスカッションから体を動かす遊びまで、生徒たちが英語レベルに合わせて活動を選べるよう、ブースを作ってもらった。また、今回の参加留学生は日本で学位取得予定の正規留学生ということで、大学生活や進路決定について尋ねることもできた。当日の運営はすべて生徒団体が行い、留学生をもてなすための和太鼓の体験なども自分たちで企画・実演した。日本に来てからコロナ禍であまり交流ができない日々が続いた留学生は交流への意欲は高く、お互いに実り多い時間をすごすことができたことが留学生対象の事後アンケートや東京国際大学とのふりかえり会からもうかがえた。

2．ALT によるイングリッシュランチ

今年度より週に 1 回、本校 ALT と昼休みにホールで一緒にランチをとる会を設けた。休憩時間だとリラックスして話すことができ、放課後は課外活動に使うことができる。思い切り英語で話したい帰国生の憩いの場や、異なる学年の生徒と交流したりする場にもなっているようである。

② 児童生徒の感想

東京国際大学とのイベント後は参加者にアンケートを実施した。「普段外国の方々と話す機会がなくて、勝手に話すのが怖いと思っていたのですが、全然そんなことなくて、自分の外国の人と話す抵抗がなくなる良い機会になりました。」「この交流は、留学生の人がとてもリアクションをしてくれて話しやすかったのと、英語がわからなかった時、日本語で対応してくれたところや、質問で大学の決め方や自分の学部の良し悪しを聞くことができとても参考になった。」「前回参加した交流会より沢山のことを会話出来た。インドネシア語を勉強していたので、インドネシアから来た人とインドネシア語で会話が出来た。インドネシアの伝統的なおもちゃや服を教えてもらった。とても楽しかった。」など、各生徒が国際交流に勇気をもって踏み出した様子がわかる。1 年次が主に参加したので、大掛かりで楽しいイベントが本校での国際交流にあこがれを抱いていた新入生たちの背中を押すきっかけとなった。今後の希望として「日本語禁止で何かゲームをしてみたい」「直接英語を使った活動をしてみたいです」という回答も多く、語学学習への動機づけにもなったようである。

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

【小学部】

小学部では今年度も、３・４年生外国語の授業に Nancy 先生、５・６年生外国語の授業に Ruth 先生をお迎えし、月１回ネイティブの英語に触れる機会を設けました。また昨年度、初めての試みとして実施した１・２年生に向けたイングリッシュワークショップに、今年度は Nancy 先生を ALT として迎えました。ここでは、３年生の外国語活動と、１・２年生のイングリッシュワークショップでの様子をお伝えします。

３年生では、今年度から外国語活動の学習が始まり、毎回意欲的に取り組む姿がありました。Nancy 先生との初回の授業では、英語で自己紹介をしたり、“What's this?”ゲームをしたりしました。初めは緊張気味だった子どもたちですが、Nancy 先生のあたたかい授業の雰囲気にだんだんと緊張もほぐれていったようでした。この日は、母の日が近いということで、最後の工作の時間には、お花紙で花束を作ったり、動くちょうちょうを飛ばしたりしてプレゼントを制作しました。子どもたちは、「見て！」「ちょうちょう、今こうやって飛んでいるの！」と、互いの作品を鑑賞しあいました。11 月の授業では、Nancy 先生とアルファベットブロックで単語作りをしたり、工作をしたりしました。工作では、「収穫祭」でよく食べられるという七面鳥を作りました。工作の直前には、本物の鳥の羽や畑に立たせるかかしの人形を見せてもらったり触らせてもらったりして、イメージを膨らませていました。

Nancy 先生との授業の回数を重ねていくにつれ、英語での簡単なあいさつや“How are you?”“I`m fine.”“I`m hungry.”のようなやりとりにも慣れていき、制作活動にも毎回楽しんで取り組みました。

アルファベットブロックでの単語作り

絵を見て英単語の学習

１月と２月の２回実施した１・２年生のイングリッシュワークショップでは、１・２年生の児童が自分の名前を英語で紹介したり、音楽に合わせて身体を動かしたりすることで英語に親しみました。初めての英語の授業に緊張した様子の子どもたちでしたが、Baby Shark の歌では、歌詞を聞きながら指や手全体を使って、Baby Shark、Mommy Shark、Daddy Shark、Grandma Shark、Grandpa Shark を表現しました。両手でサメの口を表現し、子どもたちが自分で考え、その動きを大きくしたり、小さくしたり、ゆっくりしたりして表現していました。Head shoulders knees and toes では、Nancy 先生が一つ一つの単語を英語と日本語で説明してくださり、単語が示す体の部位を全員で一緒に確認しました。何度か練習したあと、だんだんスピードが速くなるバージョンに合わせて、楽しく身体を動かしました。その他、Finger Family、Row Row Row Your Boat では、歌にでてくる単語を皆で言ってみたり、その単語が意味する動作を行ったりして英語体験をしました。

この機会が、３年生から始まる外国語活動に向けて、英語に触れ、英語学習を楽しむ経験となってくれたことと思います。

（文責：岡宮　彩菜、亀井　笑）

音楽に合わせて体を動かして表現する様子

【中学部・高等部】

１．活動報告

中学部では、ロシア出身の方を講師に迎え、10 月から２月までに１年生が２回、２年生が２回、３年生が３回、総合的な学習の時間を利用して対面で実施することができた。母語を違える者同士でも英語を使うことでコミュニケーションを取ることができると実感できる、良い経験になった。

どの学年も、初回はお互いに自己紹介をし、２回目以降は、講師の方が来日した際に驚いたことや困ったことや、日英露での動物の鳴き声を表現する方法の違い、日本で旅行するのにお薦めの場所など、それぞれの学年の状況に合わせた内容を話し合うことができた。生徒にとっては、英語を使う経験に加えて、異文化を知る機会も得られ、英語ネイティブの方とのコミュニケーションとは異なる、充実した学びとなった。

高等部では、６月から３月まで、計 27 回のイングリッシュルーム活動を実施した。そのうち、22 回の講師は、昨年度と同様、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーに依頼した。方法はオンラインで１対１とし、１人６～８分間を確保した。また、クラスを二分し、火曜日を高１高２、金曜日は高３を対象とした。講師の先生が話題を用意してくださり、生徒も苦労しながらもコミュニケーションを楽しんでいた。

また、５回についてはロシア出身の講師に来校していただき、対面で実施した。各クラスで希望者を募り、グループで１人１・２問の質問を尋ねるという形式で行った。普段あまりロシア文化に触れることのない多くの生徒にとって、刺激的な時間となった。

２．生徒の感想

【中学部】

・英語で会話をする機会が少ないので、自分のことを話せてすごく勉強になりました。自分が話すだけではなく、先生の出身の国の話を聞くこともできて楽しかったです。

・はじめは緊張していましたが、最後の時には英語でお薦めの場所を伝えることができ、人に自分の好きなことを伝えられる楽しさを知りました。また、実際に会ってお話しできたのでネイティブなイントネーションも聞け、少しずつリスニングもできるようになりました。知らない単語があってもその他の知っている単語を聞いて想像したり、反応を聞いて相手が笑ってくれているなどがわかったり、これからコミュニケーションを取るうえで必要な技術も身につけられたと思いました。とても楽しく交流できて嬉しかったです。ありがとうございました。

【高等部】

・イングリッシュルームで、毎回８分間一対一でネイティブの方とコミュニケーションができるという貴重なお時間をいただくことができました。自分の将来像から日本の文化まで幅広いテーマについて会話ができ、自分が伝えたいことを英語で話す力を向上させることができました。またロシアからいらした先生とのクラスでは、丁寧に１人１人の質問を聞いてくださり、１時間のグループトークを通してこれまでほとんど知識のなかったロシアについて様々な面から知ることができました。先生は日本に強い興味を持ってくださっていて、日本の話題も多く、両国を比較することによって、異文化理解を深めることができました。英語のスピーキング力は自主学習では鍛えることはなかなか難しいため、定期的に英語で話す時間をいただけたことをうれしく思っています。

・私はそこまで英語が話せるわけではありませんが、アベッシュ先生がリードしてくださりわかりやすい質問をしてくれたので話しやすかったです。特にイングリッシュルームのある季節に合わせた会話で、秋に何をするかなどの質問が日常的で答えやすかったです。また自分の進路のことや目標を英語で話す練習もしました。なかなかやらないことなので単語がわからない部分なども多々ありましたが、回を重ねるごとに少しずつ上達していったと思います。３年間イングリッシュルームをやって実際に海外の人と一対一で話すことができて、自分の英会話能力が向上したと実感できました。

（文責：片山　翔）

「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して

１．活動報告

本校の子どもたちは、音声に加え非言語情報（話し手の表情や口の動き）、視覚情報（文字、絵等）など様々な情報から話の内容を理解しコミュニケーションを取っている。そのため、イングリッシュルームにおいても音声認識ソフトや文字情報を提示して英語によるコミュニケーションを楽しむ工夫をしている。

①　小学部

小学部のイングリッシュルームは１～４年生は各学年２回、５・６年生は各学年３回実施した。

１年生はアルファベットや数字を使った活動を、２年生は学校で収穫した野菜について英語でやり取りをした。自分の話が伝わるととても喜んでいた。

３年生と４年生は英語で自己紹介をするとともに、英語で質問をする活動をした。“Do you like～?”、“What～do you like?”などの英文を使って、日本やアメリカでの生活について、たくさん質問をすることができた。講師は写真なども使って、児童が興味をもっているアメリカの食べ物やテレビゲームのことなどたくさんやり取りをすることができた。

５年生は　“I like～. How about you?”“How many～do you have?”などの英文を使ってやり取りをした。６年生は自分が住む町について英語で発表するとともに、これまで学習した英文で質問をする活動をした。児童たちは自分が作った英文が講師に伝わるうれしさを感じるとともに、日本とは異なるアメリカの文化を学ぶ貴重な機会になった。

②　中学部

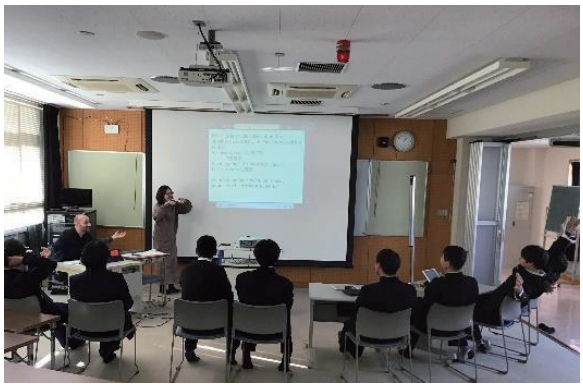
中学部では以前からお世話になっている外国人講師をお迎えし、昼休みにイングリッシュルームを開設している。中学生の場合は使用できる語彙や文法が学年によって著しく異なるため、学級ごとに日を指定して行っている。日を指定することにより、英語に苦手意識がある生徒も講師とのコミュニケーションを確実に体験する機会をもつことができる。また、指定の学級以外の生徒も出入りすることができるようにしているので、昼食が終わって講師のいる教室に来て話している様子もよく見られる。上級生が下級生に英単語を教えたり、説明をしたりする場面もあり、異学年の生徒同士が英語を使って交流する機会ともなっている。

講師にはあらかじめ生徒が学習している教科書の内容や文法を伝え、導入の発問やスピーチを考えていただいている。講師は日本で長く英会話教室を営んでいる方で、日本人に多い間違いに熟知しており、きちんと答えられるか試すような質問をすることもある。例えば、生徒があまり深く考えずYes あるいは No だけを答えてしまうと、さらに質問を重ねていき、本当は「分からない」と答えたり、より詳しい情報も加えたりすべきだったと生徒が気付くような場面がある。また、質問に答えた後の話題のふくらませ方など生きたコミュニケーションを実感できる機会となっている。

③　高等部普通科

高等部普通科では、昼休みの時間を使って５回実施した。昨年度から継続している講師には、週に１度、各学年、各クラスの英語の授業に協力していただいている。イングリッシュルームでは、参加した生徒の興味あることについて質疑応答を英語で行う形式で進めた。生徒は積極的に講師に質問したり、話しかけたりして、楽しく会話を進めることができた。本年度は、生徒がロイロノート・スクールのカードに質問や話題を書き込み、提出箱に提出し、そのカードに講師が答えを書き込む形式で進めた。参加者が自由に講師に話しかけ、カードに答えを書き込み、話の流れが伝わりやすくした。講師が覚えた手話を使いつつ、英語はカードに書き込むことで、より講師との会話を楽しめたようだ。

参加した生徒は「最近流行っているものについて話すことができた。」「英語での会話表現が覚えられた。」と感想を言っていた。イングリッシュルームは少人数で行われるので、講師に手話を教えてあげたり、英語で話しかけたりと授業時よりも自由に話すことができたようだ。



④　高等部専攻科

専攻科では今年度、５回のイングリッシュルーム活動を実施した。普段は英語を使う機会が少ない生徒たちにとって、英語を使用したコミュニケーションが大変良い経験となった。実施に際しては、講師との事前の打ち合わせを行い、生徒が楽しめるような内容にした。また、音声認識アプリを利用して情報保障を行い、オンライン掲示板アプリ Padlet をコミュニケーションツールとして活用した。活動終了後、生徒たちからは「英語で話すのは苦手だったが、身振りでも伝わり、楽しい思い出を作れた。」「先生はとても明るく、表情豊かで、英文だけで理解しきれなかったところもジェスチャーなどを使ってくださり、分かりやすかった。」「先生から見た日本が、私たちとは異なる視点で話されていたのが印象的でした。」「将来はアメリカの観光地などに行ってみたいと思いました。」「先生と過ごす時間が終わってしまい、改めて寂しいと実感しました。また一緒にお話しできることを期待しています。」といった感想が寄せられた。イングリッシュルームを通じて、生徒一人ひとりが英語によるコミュニケーションや異文化交流の楽しさを実感できた。

附属大塚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

ALT（Assistant Language　Teacher）による外国語（英語）学習

本校では今年度もLily先生に来校していただき、各学級年に４回程度の授業を実施した。

年度初めにはALTとの打ち合わせを実施した。大まかな幼児児童生徒の実態を伝え、年間の指導計画で見通しを共有した。また、学期ごとにALTと授業について話し合う時間を設け、子どもの実態や指導内容について意見を交換し合った。1 学期末の話し合いでは、幼稚部から高等部まで同じような教材を使用していることが課題として挙げられた。同じ教材を毎年繰り返し使用することで、学習を積み重ねることができるという良さがある一方、生活年齢に合わせた教材を使用して学習をしていきたいという意見が出た。その結果、２学期以降は各学級の実態に応じた内容や活動が増え、子供たちにとってより興味関心の持てる時間となった。２学期末の話し合いでは、どの学級も以前より英語に興味を持ち、楽しんでいる様子が報告された。これまでは英語で話すことが難しかった子供たちも、少しずつ話すことができるようになり、コミュニケーションを楽しんでいる姿が多く見られた。

（文責：長谷川　浩子）

楽しみながら学ぶイングリッシュルーム

１．活動報告

新型コロナウイルス感染拡大防止策が緩和され、対面実施の機会を確保することができた１年であった。昨年度は対面とオンラインとを併用させて行っていたが、児童生徒にALTとのよりスムーズな英語でのやり取りを実感してもらうべく、コロナ以前の形に戻して行った。当初は５月にイングリッシュルームを開始する予定であったが、ALT の都合により７月に始まった。参加した生徒にとっては待ち望んでいたイングリッシュルームの開始となった様子であった。

定期的なイングリッシュルームでは、小学部は低学年、中学年、高学年と学年別に回数を確保し、中学部と高等部は１学期は学部別に、２・３学期は合同で行い回数の確保に努めた。夏季休業期間中のイングリッシュルームでも対面で実施し、各回４５分で行った。開催回数としては小学部５回×４日間、中・高等部５回×１日で設定した。

夏季イングリッシュルームの実施内容としては、小学部は英語に慣れ親しむことができるよう、英語を使って楽しむことを重視し、中・高等部は既習の知識をコミュニケーションの場で活用するという視点から内容が構成された。（写真１４）具体的に小学部低学年では、アルファベットやフォニックスを映像と共に歌ったり、指でアルファベットの文字をなぞったりしながら学習していた。中学年では数字の読み方や、“Do you like〜？”“Yes, I do.”や“No, I don’t.”のやり取りを歌いながらジェスチャーも交えながら表現していた。高学年では、おもちゃの受話器を使って電話での表現をやり取りしたり、お店屋さんごっこでは“I want 〜. How much is this?”などの表現を小道具を使ってよりリアルな形で行い、会話練習を楽しんでいた。中・高等部ではカードを使った会話練習を中心に行った。（写真１５）例として、形容詞や動詞を覚えるために“Who am I?”クイズを行ったり、“fish”が単数形・複数形とも常に“fish”と数えることを理解するために“Do you have three yellow fish?”“Yes, I have three yellow fish.”など、カードゲームを通して表現を身に付けていた。中でも中学部の生徒はカードゲームに熱中するあまり、負けてしまうと泣き出しそうになったり、勝てば喜びを爆発させていたりなど、単なるゲームとは捉えず真剣に勝負をして盛り上がっていた。

特に印象的であったのが、１学期の間不登校気味であった小学部の児童が、イングリッシュルームに毎回通い続けることで自信を得て、２学期の登校に繋がったことである。理由はおそらく、遊びを交えて楽しみながら行ったことはもちろん、その児童が取り組みやすくなるよう、ALT がその日の児童のペースに合わせて取り組む内容を調整したためであると思われる。少人数で英会話を学べるため、不登校の児童生徒にとってもいい刺激になることがあるのだなと、改めてイングリッシュルームの良さを実感した次第だ。

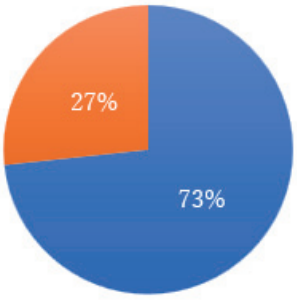
（写真１４）

（写真１５）

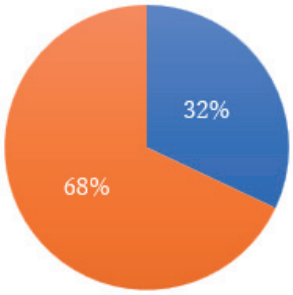
２．児童生徒の感想（児童生徒のアンケート回答より　　回収数　小 30/36　中・高 39/55　）

今年度のイングリッシュルームの取り組みについて、児童生徒へアンケートを行った。その中からいくつか抜粋する。

質問１．今年度の参加の状況について（青：参加　　赤：不参加）

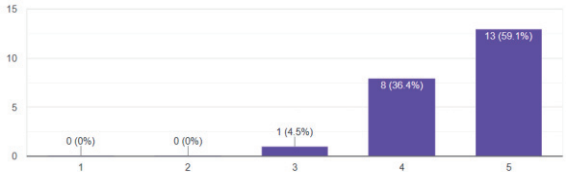


小学部

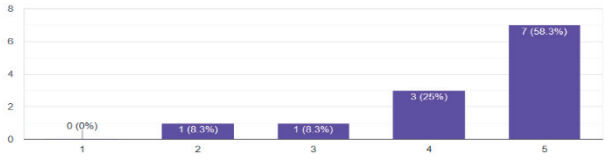


中・高等部

質問２．イングリッシュルームは楽しいですか。（５・４・３・２・１　←とてもそう思う　全くそう思わない→）

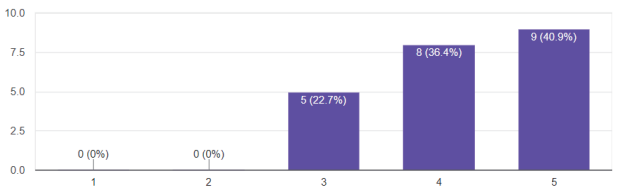


小学部

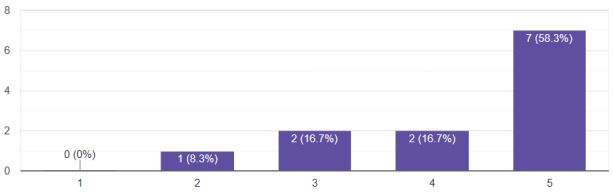


中・高等部

質問３．　イングリッシュルームは役立つことが学べますか。

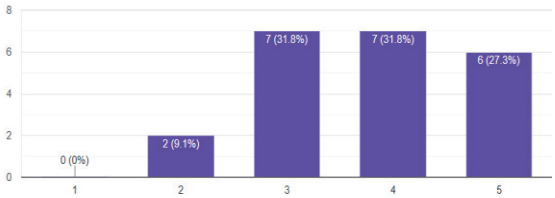


小学部

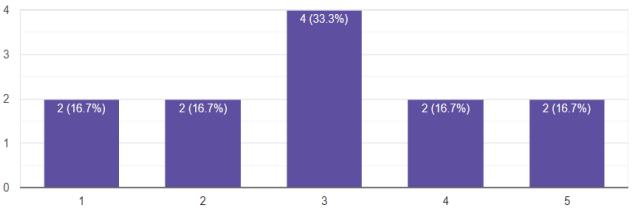


中・高等部

質問４．　イングリッシュルームに参加してきて自分は変わりましたか。



小学部



中・高等部

【自由記述】
質問５．イングリッシュルームで行ったことの中で、楽しかったことは何ですか。
≪小学部≫
・ハロウィンパーティやクリスマスパーティのイベント
・カードゲーム
≪中・高等部≫
・カルタなどのカードゲームを通して英語を学べたこと。
・冬休みの予定を伝え合ったこと。

質問６．イングリッシュルームで行ったことの中で、難しかったことは何ですか。
≪小学部≫
・先生がずっと英語で喋っていること。
・歌
≪中・高等部≫
・英語のじゃんけんで陣取り合戦をしたとき、手が動かしにくく難しかった。
・英語を使って何かを発表するのが難しかった。

質問７．イングリッシュルームに参加して自信は何か変わりましたか。
≪小学部≫
・英語の授業でも話すように心がけるようになった。
・英語をもっと話せるようになりたいなと思った。
・英語を少しずつ話せるようになった。
・英語をもっと好きになった。
≪中・高等部≫
・英語の授業がさらに楽しくなった。
・以前よりも英語に興味を持てるようになった。
・英語を好きになった。
・英語の勉強を頑張るようになり、英語関係の職に就きたいと考えるようになった。

質問８．イングリッシュルームに参加しなかった理由は何ですか。
≪小学部≫
・時間が合わない。
・放課後だと疲れてしまうから。
・放課後予定があり、参加したいができないから。
≪中・高等部≫
・英語が苦手だから。
・部活と重なっていて、曜日が合わないため。
・身体を休めたいため。

質問９．自由記述（今後の要望）
≪小学部≫
・身体を動かしたりする英語ゲームをやりたい。
・高学年のお兄さんお姉さんともに参加したいと思った。

・英語の歌をもっと知りたい。
・子供としては雰囲気はとても楽しいと思っているようですが、オールイングリッシュが少し負担な様子だ。とは言え、英語教室で日本語禁止にしている所は多いので、定期的に継続して通えるのであれば、今のままでもいいのかなと思う。今後も断続的ではありますが、利用させていただきます。
（保護者）
≪中・高等部≫
・他学年と一緒に学べるのが楽しい。
・英語の歌を歌う。
・英語は得意ではなく恥ずかしいので、個別であれば参加できるかもしれない。
・オンラインで海外の子どもたちと話したい。

アンケートの結果から課題として、小学部の参加率は高いが、中・高等部になると参加率が大幅に下がる傾向がある。理由はおそらく、小学部では英語学習の導入として苦手意識を植え付けないよう、楽しむことを重視して内容が展開されていくが、中・高等部の生徒にとって、通常の授業で英語学習の内容がより難しくなると、英語に対して苦手意識を持ってしまい、イングリッシュルームへの参加が遠のくのではと予想される。一方、中・高等部の参加者の声として「英語は苦手だが、ゲームなどで楽しく学べる。」「英語を話すことへの不安がなくなるため参加した。」「他の人とも会話できるし、自分が知らない単語でも先輩たちが意味などを教えてくれるから。」など、参加してみると意外と難しくなく楽しめるのだなと実感している様子がある。この実態を踏まえて、英語に苦手意識の強い生徒には個別にイングリッシュルームの参加を呼び掛け、苦手意識の克服に繋げたいところだ。
他にも不参加の理由として、曜日や日時が合わないという回答が複数あった。このことは、当校に在籍する児童生徒の中には遠距離の通学やリハビリテーションを含んだ定期通院など、放課後の活動時間を確保することが難しいという背景も影響していると考えられる。そのような場合は、夏季イングリッシュルームを活用し、ALT と会話する機会を確保してもらえればと考える。今後はイングリッシュルームが英語に触れる機会、楽しむ機会、じっくりコミュニケーションをとる機会として機能し、英語を幅広く活用できる場となるよう整えていきたい。

6. おわりに
ポストコロナ本学附属学校の国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会 委員長　梶山　正明

2023年度は、5月にCOVID-19の感染症法上の位置づけが季節性インフルエンザなどと同じ「5類」に移行し、政府・大学による行動制限がなくなったことに伴い、対面による国際交流を再開した附属学校が増加した。また、オンラインによる交流の継続や海外からの研修の受け入れなど、各附属学校の特色を生かした国際交流が実施された。

本報告書に記載されている交流先の国名を列挙すると、アジア（アゼルバイジャン、イラク、インドネシア、ウズベキスタン、韓国、カンボジア、シンガポール、タイ、台湾、中国、ベトナム、ミャンマー、モンゴル）、ヨーロッパ（イギリス、ジョージア、デンマーク、ドイツ、フランス）、南北アメリカ（アメリカ、ウルグアイ、カナダ、グアテマラ、コロンビア、ドミニカ、パラグアイ、ベリーズ、ペルー）、オセアニア（オーストラリア）、アフリカ（エジプト、シェラレオネ、ジンバブエ、ボツワナ、ナイジェリア、マダガスカル、マラウイ、モーリシャス、モロッコ、リベリア，ルワンダ）と、39カ国におよぶ。

各国との交流の形態はさまざまであるが、昨年度は附属坂戸高等学校1校にとどまった学校主催の海外研修が、附属小学校、中学校、高等学校、駒場高等学校の4校を加えた計5校で実施された。また、行動制限下での交流の経験を生かしたオンライン等による交流を引き続き進めた学校もあり、海外からの教員研修を受け入れた学校が多かったのも今年の特徴である。そのほか、留学生等を活用した交流、異文化理解イベントへの参加など、各校で児童・生徒の状況に合わせた国際交流の取り組みが盛んにおこなわれた。活動の詳細については、各校の報告のページをご覧いただきたい。

以上のように各附属学校における国際教育は、コロナ禍を経てさまざまな工夫を凝らして実践を進めており、国際教育推進委員会の場などを活用しながら附属学校間における情報共有をさらに充実させていきたい。また、こうした実践例について、より一層のブラッシュアップを図るとともに、国立大学法人の附属学校として新たな国際交流のモデルとなるような取り組みについては、対外的な情報発信を進めていきたいと考えている。

一方、WWL事業においても、ALネットワーク、筑波大学の授業等のリソース、各附属学校の国際交流のノウハウ等を活用し、次世代の人材育成を目指した国際教育を引き続き進めていきたい。その一環として、昨年度採択された「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」を推進し、今年度試行的に実施した大学の授業の高校生による聴講を継続して実施するとともに、オンラインを中心とした大学の授業の先取り履修コンテンツ提供の準備を進め、令和7年度が開始目標の「大学の学びの先取り履修システム」の構築を進めていく。

国立大学法人の附属学校は、エネルギー・環境問題をはじめとする、地球規模の課題に立ち向かう次世代のグローバル人材の育成に向けて、新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを帯びている。そこでは、環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的な課題の解決に取り組み、その過程においてリーダーシップおよびフォロワーシップを発揮できる人材の育成が求められている。引き続き、個々の附属学校が全国のセンター的な存在として先導的な教育活動を実践するとともに、筑波大学の国際展開力を活用した高大連携による国際教育活動をさらに推進し、地球規模課題にも地域的課題にも貢献できる人材の育成を目指していきたい。

（資料）附属学校の国際交流協定締結状況

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校						
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒の相互交流の意義とその可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的として結ばれた協定のなかで、北京師範大学第二附属高校と筑波大学附属中・高等学校及び附属駒場中・高等学校も付随して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結んだ際、附属高等学校も交流組織の一つとして参加した。
附属駒場中・高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	北京師範大学附属実験中学との中等教育分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学との交流協定締結に協力した。
	中華民国（台湾） 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2015.12.11～ 2020.12.10 2020.12.11～ 2025.12.10	研究発表（主に理系分野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校間の提携を促進し、生徒達の国際的な視野の拡大を促進することを目的とする。	本年４月、相手校から姉妹校協定締結の申し出あり、５月１日に本校校長他が訪問した際に詳細な打合せを行った。５月27日、相手校校長が来校し、詳細事項を詰めた。2020年12月、台中一中とのオンライン研究交流の際に、オンライン上で本校と相手校長が締結更新の調印を行った。
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校	2010.12.1	2023.2.10 ～2028.2.9	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが2008年に採択を受けた文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業に端を発する。その後トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けた活動や「アジア高校生聞き書きプログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育センター	2013.3.19	2023年度現在更新手続き中	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や「アジア高校生聞き書きプログラム」等でのインドネシアでの活動の際に協力を得たことから交流が始まった。林業教育センター・インドネシア林業省・在日インドネシア大使館の強い要望を受け協定締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第６高等学校	2015.9.1	終了	国際協働学習、ESD，ユネスコスクール間の国際ネットワーク構築	生徒及び教師の異文化理解及び国際的研究活動のため	2012年５月のインドネシアユネスコ国内委員会との交流を契機として、毎年本校と同委員会との交流を深めていった。2014年ユネスコスクール関係者他が来校し、パダン校から強い関心を示され、2015年本校教諭が訪問し準備を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ルーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1～ 2021.10.31 2023年度現在更新手続き中	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2016年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
	インドネシア共和国 インドネシア教育大学附属高等学校	2023.8.7	2023.8.7～ 2028.8.6	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	インドネシア教育大学附属高等学校では、ESDやSDGsに関係する探究活動も実施されている。その成果は、本校が主催して実施している「高校生国際ESDシンポジウム」に2020年度から参加している。また、2020年度から、SEAMEOの国際プロジェクトSEA-teacherを相互に受け入れており、本学の学類生の国際的な活動の推進にもつながる。高校、大学双方に効果の期待できるため締結を行った。
	タイ カセサート大学附属高等学校	2017.11.9	2023.2.10 ～2028.2.9	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2017年に交流協定に関する合意にいたり締結した。

（2019年4月～2024年3月）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	現在は特になし	現在は特になし	現在は特になし	2009年10年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007年、2008年にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH事業として北京を訪問	SSH事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は1ヶ月程度～1年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する5つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		現在、協定延長に関する協議を継続中
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業，大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESDおよびその後継事業であるGAP活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生とフィリピンに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・科学教育に熱心な高校であり、科学分野の探究活動について、相互の知見の共有ができる。 ・SEA-Teacherによる国際教育実習で、受け入れ側としては生徒、教員の国際化、送り出しとしては、筑波大学の学類生が、海外で教育インターンシップに取り組む際に、受け入れ側高校から多くの情報を得ることができる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動		
・本校の生徒に交換留学生としてタイに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・タイから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属視覚特別支援学校	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）	2020.1.13	2020.1.1 ～ 2024.12.31	短期留学を含めた生徒間の学習活動の交流 視覚障害教育及び関連分野に関する情報交換	両組織の生徒の交流活動を通して、生徒の国際感覚及び学力の向上を推進する 両国の文化について深く学び合うとともに、視覚障害教育関連の活動を推進し、両国ならびに両組織の発展に寄与する	2015 年から 2017 年にかけて、教育長裁量経費によりタイプログラムを実施。高等部生徒が毎年タイに渡航し、タイの視覚障害生徒との交流が行われた。 2018 年度からは、文部科学省トビタテ！留学 JAPAN の制度を活用し、高等部生徒の短期留学が始まる。今後短期留学を定期的に実施する計画があることから、2019 年に協定について打診し、2020 年 1 月に締結に至った。
附属聴覚特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2021.9.30 ～ 2026.9.29	初等中等教育（特別支援教育）における生徒間交流	フランスと日本両国の友好と親善を促進するとともに、両国の聴覚障害教育の発展に寄与する	1999 年頃、本校高等部専攻科生徒とパリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通を開始した。 2002 年、パリ聾学校長から姉妹提携の申し出があり、2003 年 9 月、パリ聾学校にて、交流協定書を交わした。
	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2023.6.1 ～ 2028.5.30	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換	両校は、特別支援教育とりわけ聴覚障害教育に関わる教員交流・生徒交流・情報交換を通して、両国の文化について深く学び合うと共ともに聴覚障害教育関連の活動を推進し、両国並びに両校の発展に寄与する。	2008 年、筑波大学教員と本校校長他が美術教育における ICT 教材の共同研究をすすめるために訪問、その後、本校中学部生徒との E-mail での交流活動を行うなど交流協定の基盤を築き締結に至った。
附属大塚特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学校	2009.12.29	2009.12.29 ～ 2014.12.28	知的障害教育の実践・研究（指導法・教育課程・教材教具等）	教員の交流、生徒の交流、共同研究・研究交流の推進、研究成果・研究資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児教育が既に交流協定を締結しており、本学と同様の特別支援学校を有することから、学校間交流にまで協定を広げ、現場での教育実践・研究の国際教育協力を推進する必要があった。
	インドネシア共和国 チパガンティ特別支援学校	2018.2.	2018.2. ～ 2020.2	知的障害特別支援学校における授業研究会をとおした情報交換・交流	・授業研究会による交流において教師の授業力の向上を図る	2017 年 11 月に、本校の教諭２名がチパガンディ特別支援学校を訪問した。授業研究会に参加し、インドネシア教育大学にて日本の知的障害特別支援学校の教育について講演をした。講演には、インドネシア国内から特別支援教育に携わる 500 人以上の教員が集まり、日本の特別支援教育への関心の高さが窺えた。授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できると考えた。
附属桐が丘特別支援学校	大韓民国 セロム学校 （旧三育再活学校）	2010.2.3	2018.2.13 ～ 2023.2.12 更新なし	・児童生徒間の学習活動の交流 ・肢体不自由教育及び関連分野に関する情報交換	・日韓両国の肢体不自由教育の充実と発展に寄与するため。 ・国際教育の視点の一つである日韓の相互理解と親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に挙げている“国際教育拠点事業”の一層の充実を図るため。	2007 年・2008 年、両校の研究部長が双方で開催された研究会に出席し、それぞれ取組を発表。2008 年度末、本校の代表生徒１名を含む訪問団を同校に派遣。2009 年、校長ほか２名が同校を訪問し、国際交流協定締結に向けた事前調整を実施。同時にスカイプを使った交流授業を開始。2010 年２月、再び同校の校長、研究部長等を本校の研究協議会に招聘し、開催前日に国際交流協定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24 ～ 2021.11.23 更新なし	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014 年５月、台湾国立南投特殊教育学校の校務顧問が来校し、国際交流協定締結の可否について打診。これを受け、同年 11 月に本校校長ほか３名が同校を視察し、国際交流協定の締結の可否について検討。2015 年 10 月、同校校長を含む訪問団が来校し、その際に 2016 年の国際交流協定締結を約束するに至った。
	台湾 国立和美実験学校	2016.11.25	2016.11.25 ～ 2021.11.24 2023 年度現在更新手続き中	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014 年 11 月、本校校長ほか３名が、台湾唯一の肢体不自由者を教育する特殊教育学校である同校を視察。2015 年 11 月、本校副校長ほか２名と代表生徒２名で同校を訪問し、国際交流協定締結の可否について打診。その際、2016 年の国際交流協定締結について内諾を得た。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
生徒の国際的素養や国際感覚を身につけ、将来世界で活躍する視覚障害者を育成することができる。 国際教育拠点の視覚特別支援学校として、日本の視覚障害教育をタイに発信及び展開させていく。またタイのインクルーシブ教育にも貢献できる。	学校訪問、視覚障害教育に関する情報交換等	短期留学プログラムの実施 Zoom を含む web 会議システムを活用した交流活動		
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立パリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が５校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他４校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールや HP などを通じて幼児児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭がおり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系 DC 修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
・授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できる。 ・交流を通して得られた知見の発表し、知的障害教育の実践分野における国際教育拠点として貢献できる。	互いの学校の授業研究会に教諭をそれぞれ派遣し、情報交換、意見交換を行う。 授業研究における Web 会議を通して、教員間の相互の専門性の向上を図る。事前に授業研究の動画と指導計画（翻訳済み）を確認してから研究会議に臨む。	Web 環境を整え、今後生徒間の交流をインターネット回線やビデオレター等を使って交流を実施させたい。		交流時期と両国を結ぶ通訳者の安定的な供給が必要である。その為の予算確保。
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国語学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010 年、高等部３年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012 年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。

項目 学校名	締結相手 （国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属久里浜特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2011.8.29	2023.7.3～ 2028.7.2	・教員間の教育実践研究 ・児童生徒間の教育活動	・日中両国の自閉症児教育の充実と発展に寄与するため。 ・日中の相互理解と親善を図る。	・2011年に姉妹校締結を結び、2016年に期間更新を行い、現在に至る。 新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、達敏学校の陳岱校長から、「両国の特別支援教育を発展させるために今後も深く協力したい」旨の連絡があった。加えて、杭州市で開催予定の第19回アジア競技大会に向けて、児童生徒同士の交流も充実させたいという熱い要望があった。さらに、年度途中で赴任した陸雪萍校長からも、姉妹校の再締結やオンラインでの教員間や児童生徒間の交流についての要望を受けた。
	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2022.11.17	2022.11.17～ 2027.11.16	・教員間の教育実践研究	・日中間の文化交流を深め、両国の特別支援教育領域の促進を図るため。	・新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、仁愛学校の唐妍教諭から交流を再開したいという連絡があった。仁愛学校の創立10周年を記念して、中国全土を対象として自閉症児交流会を開催するため、本校に日本の実践を紹介してほしいこと、仁愛学校の教員が本校研究会に参加したいことなどの要望を受けている。また、同校には、日本の大学院を修了した教員が在籍しており、今後の交流に向けての窓口や通訳として適任であり、連絡調整が円滑に進む利点がある。

締結・更新の記録

年　　度	学　校　名	新規／更新	相手校・機関
平成21（2009）年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	〃
	附属駒場中・高等学校	新規	〃
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成22（2010）年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成23（2011）年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	〃
	附属駒場中・高等学校	更新	〃
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成24（2012）年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成26（2014）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成27（2015）年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	新規	国立パダン第６高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	〃	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成28（2016）年度	附属小学校	新規	光州松源初等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	〃	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
・達敏学校と本校は、これまで教員が相互に訪問して交流を重ね、日中両国の自閉症教育について情報交換を行ってきた。加えて、達敏学校からの研修生を受け入れ、知的障害を伴う自閉症児に特化した教育課程や効果的な支援方法について講義を実施してきた。今後も、オンラインでの授業研究会等の実施を通して、教育実践の面においての交流を深めることで、達敏学校の自閉症教育に関する専門性を高めることができると考える。また、アジア競技大会に向けて、児童生徒同士の交流も充実させたい。こうした交流は日中友好の観点からも有意義な効果が得られると期待される。	・中国のリモートワークアプリケーション「DingTalk」を使用し、オンラインでの交流を進めている。姉妹校締結式の機会を活用し、双方の学校紹介動画の視聴を通して、教員間で相手国の文化や自閉症教育への理解を深めた。達敏学校における国際交流の窓口兼通訳である刘畅教諭と定期的にやり取りをしながら、今後の交流の方向性を検討中である。	・2023年に中国杭州で開催されたアジア競技大会に向けて、第1回目の幼児児童の交流を行った。クイズ大会やダンス披露などの活動を通して、世界の国や様々な競技への興味・関心を高めることができた。今後も、活動の形態や内容を工夫しながら、幼児児童同士の交流を継続する。		・2014年には、二度にわたり本校教員が達敏学校を訪問し、達敏学校幼稚部新設に伴い本校の指導実践と家族支援についての情報提供や情報交換を実施した。 2015年と2017年において、達敏学校の現職教員10名程度を研修生として受け入れ、本校の教育課程や自閉症児の障害特性に応じた指導に関する講義を実施し、自閉症教育についても意見交換や授業実践についての協議を行った。
・仁愛学校と本校は、2014年から2019年まで国際交流協定を締結し、教員が相互に訪問して交流を重ねてきた。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、オンラインを活用し、授業研究会や研修会を実施することで、本校教員の専門性を高めながら、仁愛学校の自閉症教育の発展にも寄与できると考える。	・中国のリモートワークアプリケーション「DingTaik」を使用し、オンラインでの交流を進めている。仁愛学校における国際交流の窓口兼通訳である唐妍教諭と、双方の学校の現状や課題に関する情報交換を行い、今後の交流の方向性について検討を重ねた。試行的に翻訳機能を活用しながら、複数の教員間でやり取りしながら、教員間での活発な交流方法を模索中である。	・予定なし	・仁愛学校の創立10周年を記念して、中国全土を対象とした自閉症児研究会が開催された。「より良い生活に向けた自閉症児童教育の新たな探求（日本語訳）」のテーマのもと、オンラインで中国全土を対象とし、教職員が集まり、中国における自閉症教育への関心の高さが伺えた。仁愛学校から事例提供の依頼を受け、本校教諭が事例発表を行った。仁愛学校からも教職員が本校研究会に参加したい旨の要望があり、今後、双方の研究会への参加等を積極的に行い、双方の教育実践の理解を深めていきたい。	・2014年から2019年まで、国際交流協定を締結し、現在に至る。 2014には、二度にわたり本校教員が仁愛学校を訪問した。中国全土か約50名の教員を集めて開催された「日中自閉症教育シンポジウム」にも参加し、本校の教育課程等について発表した。 2016年以降は、スカイプを利用した授業研究会を継続してきた。互いの授業に対して、双方の教師が具体的に協議をすることを通して、お互いの文化への関心や理解を深めながら、教育観の違いやその背景について知る貴重な機会となった。

年　　度	学　校　名	新規／更新	相手校・機関
平成29（2017）年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	新規	チパガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人SRC附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
平成30（2018）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
令和元（2019）年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）
令和2（2020）年度	附属駒場中・高等学校	更新	台中市立第一高級中学（中華民国（台湾））
令和3（2021）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
令和4（2022）年度	附属久里浜特別支援学校	更新	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	更新	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	〃	更新手続き中	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
令和5（2023）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	更新	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
	附属坂戸高等学校	新規	インドネシア教育大学附属高等学校（インドネシア共和国）
	〃	更新手続き中	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
	〃	更新手続き中	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン）
	附属桐が丘特別支援学校	更新手続き中	国立和美実験学校（台湾）

（資料）報告書発行の記録

第１集（2007 ～ 2008 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009 年２月発行
第２集（2009 ～ 2010 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011 年７月発行
第３集（2011 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012 年３月発行
第４集（2012 年度） 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013 年３月発行
第５集（2013 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014 年３月発行
第６集（2014 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015 年３月発行
第７集（2015 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016 年３月発行
第８集（2016 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2017 年３月発行
第９集（2017 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2018 年３月発行
第 10 集（2018 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2019 年３月発行
第 11 集（2019 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2020 年３月発行
第 12 集（2020 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2021 年３月発行
第 13 集（2021 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2022 年３月発行
第 14 集（2022 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2023 年３月発行
第 15 集（2023 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2024 年３月発行

令和５年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長（教育長補佐）	梶　山　正　明	
副委員長（准教授）	飯　田　順　子	
副委員長 （附属坂戸高等学校主幹教諭）	建　元　喜　寿	
教育長	呑　海　沙　織	
教育局次長	雷　坂　浩　之	
教育局・講師	木　村　範　子	
教育局・特任助教	田　中　裕　子	
附属小学校校長	佐々木　昭　弘	
	大　野　　桂	附属小学校　教諭
	中　島　真紀子	附属中学校　教諭
	物　井　真　一	附属高等学校　教諭
	阪　田　卓　洋	附属駒場中・高等学校　主幹教諭
	青　松　利　明	附属視覚特別支援学校 主幹教諭・高等部主事
	鎌　田　ルリ子	附属聴覚特別支援学校　主幹教諭
	宮　林　一　菜	附属大塚特別支援学校　教諭
	田　辺　洋　子	附属桐が丘特別支援学校　教諭
	石　川　千　尋	附属久里浜特別支援学校　教諭